43
119

後の三日月

ちぬの浦ほとり著

はしがき

世にある人は何といふらむ我には涙なりけり、天晴れ豪傑となりそこねたる涙六が、龜太郎とて百尺の紅塵に跳返つたる衣裳を脱捨て、新参の裸身おぼつかなく座傍に轉がる一本の禿筆を荷ふて、やッともいはず罷りいでしは明治二十四年の四月、武者ならば初陣の戰場を『三日月』といふ、

本書は『三日月』は其ころ報知新聞の附録に掲載せしものなり、全篇わづかに十二回、紙屑籠に推込まれ鼠の溺に汚さるべきを、ものずきの書肆春陽堂なるものありて、乞ふがまゝ別に一部の書冊として刊行せしが、その年は背門の南瓜の豐年もろとも、拙著また忽ち世に嘯されて計倫版を重ね、普からずとも少しは世人の知るところとなりぬ、

さても其後さるほどに、思へばこれも遣損ねたる涙六が生涯の一失、あゝ已みなむと幾度か筆を抛ちしが、また止難き仔細《この處をかしく察し玉ふべからずと註す》あつて今日までも其まゝ、うかゝと可惜三年の時日を費して『三

日月』の三週まさに迫れる此ごろ、なさけないかな、書け〳〵といはるゝ苦しまぎれに、ゑゝまゝよ濡れた上の露いとひ更に詮なし、雨も降れ〳〵風も吹け吹けと自棄腹おこして、こゝに『三日月』の後譚を掲げ題して『後の三日月』といふ、まづ其はしがきは左の如し、

三日月は宵にちらりと見るばかり、忽ち消えて後は
眞暗影に影も形もなきものなれど、ちよいと戯れに
燈火かゝげて、やつてみたれば斯なものなり、

東京都立中央図書館蔵

後の三日月

第一回

ちぬの浦浪六　著

「行末は八重の汐路の海とても、みやれ木の葉の下くゞる、谷の雫の我や落滴と、」餘所の小唄を身に染めて今の哀れを心に慰め、破れし袖に思はぬ莞爾を包みながらも、いくよ旅寢の

草枕、　つらきは知らぬ他國に尾羽うちかれて、　踏迷ふたる人の上ぞと見らるゝ武士の浪人、　古編笠に手をかけて道往く男を呼止めつゝ『こゝはいづこぞ、　江戸の町へは猶ほ遠きか、いくほどの道程やらむ』　玉は碎けても塵塚に埋れず、　拔けば光ると男は腰間に目をつけながら『この堤下の右流は阪東一の利根川つゞき、　むかし男は泣いた墨田川で御座ります、　前岸は大千住、　此方は牛島菴崎、　こゝは關屋と申して綾瀬の川尻、　仰せらるゝ江戸はアレ彼炊煙、　淺草までは僅か一息』　むゝ聞及びし向島さては嬉しと、　見亘す樹々は秋なれど十月小春の後の空、　霜月の土曜に旅の額の汗や湧くらむ、　主の先途を見屆くる雨露霜雪の笠を脱いで、　路傍の石に腰うちかけつゝ疲れし兩脛を揃へて前に投出し、　ほッと大息吹いて今更

に見上ぐる浪人の面躰、　年のころ二十三四、　當世に作らば歌舞伎に妬まれむ容貌も、　をしや日に晒され風に窶れし成れの果、　色褪めたる黑の小袖に櫛の紋も黃葉味の散際、　おちて踏まるゝ身の秋なれど過ぎし嘗昔の春や語らむ腰の大小、　隙間なき糸卷の大柄に鐺の鍬形は四寸の板黃金、　たしかに小判七枚と江戸の市中に商賈の目を驚かすべし、

世にある人は三度の食に飽きて茶味を遣るころなながら、　我にハ今日の露命をつなぐ美味の飯と、　流石に椎の葉ならねど反古に包みしまゝの一握、　懷中より取出でゝ打拔く折しも、　ぽとりと落ちしは鳥の生糞、　おもはず眉を皺めて見上ぐる頭上の松が枝に、　翼をさめて垂首に我を嘲る如きハ隼といふ一羽の鷹なり、　さてはおのれ、　いかに鳥類の心なしとはいへ、　い

ま韓信が漂母の一飯にも優りし斯糧を、糞汁に汚して驚き逃むともせぬ面憎さ、みよや斯くても名譽の武士が折檻、幸ひ飢ゑたる歯にかけて骨まで盡しやらむと、飯を抛棄てつゝ右手の指を腰間に差込み、兩眼の瞳を張りて暫し見上げしが、やッとかけたる聲もろとも羽車卷いて落來る鷹は、刀の割鞘に貫かれて芋田樂に似たるを、破草鞋の爪先に搔寄せて手に取上げ、笑止や、素町人か又は武士とて術のなき奴ならば、眞向額を物の見事に汚すとも斯る憂目は見ざらむを、あはれ我ほどの男に過ちし不運さよ、いざ然らば前の清流に濯いで生肉を賞翫せむと、鞘を拔いて舌に舐りつ袖に拭ひ、鷹の羽毛を拷りながら堤の足場を下りむとせしが、忽ち人の足音ひゞいて背後に聲あり『くせものッ』

『くせものッ』うしろより呼掛けたる聲もろとも振返れば、野狩の裝束に一文字笠をいたゞく四人の武士、我から驚く面躰に憤怒の色かけて俄に取卷き『何者の狼藉ぞ下に居れ奇怪の奴』はや取挫がむばかりに詰寄る呆氣の四人を、浪人ぢかに見廻して思はずカラ〳〵と笑ひ『こゝらは野干の住むべき草叢、用心めされい』『ゑッ無禮者』『無禮の詮鑿は我よりすべきぞ、御身達まづ下に居て罷り謹め』『問答は無益、じたいその御鷹を何と心得る』『はて仰々しや、旅の浪人なれど生命の一物に糞をかけたる鳥類、手裏劍うつて仕留めしが何の奇怪』

落魄の若年ながら一語一句に急所をついて、あくまで寛々と打据りたる不敵の面魂に、四人あはせて八本の腕も白刃も俄かに動かむ隙を失ひ、たゞ大事の曲者やらじ逃さじと取卷く

折しも、あとを追ふて又もや走來る數人の武士、中に一人裏金の陣笠かぶりし野袴の老躰、仔細を聞取つて偖はと驚きつゝ、ずッと進みて浪人の鼻先に立塞りぬ『いづれの者か、みれば旅の空、知るならば夢せまじき事ながら、時の非運と諦よ、その御鷹は當將軍の御秘藏ぞ、けふは寺島の奥に雁御狩の第七番、放ちし雁は遁れて不意に外れたる休鷹を見止めむため、追來りし我々、所詮このまゝには濟まぬ一條まづ此方へ來よ、身の吉凶は御伺ひの上ぞ、南無三はッと驚くかと思ひの外、この浪人ます〳〵悠々たる顏面に微風一陣の痕もなし『なるほど、さ仰せられて解し申した、さらば斯身一個、いづこの里までも召連て御はせよ、但し枯れても武門の種、慮外めさるな』

庭前に憩ひし鶴を射て三千石の家を潰し、歴々の侍一人むなしく腹を切りしとは、眞實なりけり世上の風聞、さては浪人の我身を何とかすらむ、所詮のがるゝ道なくば、をしまねど鳥類一羽には代難き斯生命、神か佛か、まづ將軍といふ男に飛掛て物いはむづと、ままたゝかの性根を据ゑて、人垣に包れつゝ、ひかれゆくは木下川の邊り寺島の奥、一むら繁る森の隙間より漏るゝ假屋の幔幕に、うちいだしたる葵の紋所は見る目の人の膽寒けれど、あはれ櫛の我定紋に比べて僅かに大きう見ゆる呵しさ、

半町あまり此方の芝に推据られて、腰の兩刀剝がれつゝ前後左右を圍まれ、また新たに出來しは人品やゝ勝りし四十前後の役人、折掛の床几に腰うちかけて靜かに見下しぬ『其方は

いづこの産ぞ、浪人と申立てしが以前の主は誰人ぞ、御遊の興をさませしのみか、御秘藏の鷹を打取つて喰はむとせし狼藉もの、たゞちに牢舍とも相なるべきところ、不知案内の田舍者とおほしめし、格別の御仁惠を以て、只今このまゝに御詮議を下さる、もし不審なくば安穩ぞ、予は御側御用人白須甲斐直接の仰せを蒙つて取調ぶる神妙にせよ』浪人おもはず頭を上げて瞳を定め、じつと見詰むる樣は草叢より鎌首を立つる蛇に似たり『拙者奴は奥州南部のうまれ、父祖三代いづれへも奉公仕らねば、主を取りし覺えかつてこれなく、座光寺勘三郎とて眞實に葉隱れの素浪人、このたび江戸にまかりいでゝ中間小者とも相なり、一身を立てたき長旅にさんの苦勞を重ね、別して飢渴の先刻、我爲には一日一握の食を

汚されたる無念さのあまり、よしや鳳凰とて下司下郎一人に劣し鳥類と心得、箏を飛して縫ひし始末、もとより恐れ多き御方の御秘藏と知るならば、其まゝ無事に睨み落して兩掌を捧げ、せめて今日太平の世にある一分の御報恩とも致すべきもの』滑なる舌に白刃を舐るが如き言葉の端、眼中に一癖みせて散毛の鬢に冷笑ふ容躰、草に埋もれて大地に折曲げたる膝頭の突きやう、もしや不法の詮議に逢はゞ忽ち躍り掛らむ氣勢は、ぬばたまの黑闇に漁火を見るよりも著明なり、瞬目もせず見張りて聞居たる白須甲斐、おづかに首肯きて片頰に笑を含み『武骨一片に物の言樣を辨へぬ男かな、されど某殿が禁制の鶴を射しとは事變り、片田舍の不案内に飢ゑたるまゝの失躰、ありがたく心得よ御構ひなし、たゞこの上は

甲斐が一存にて念のため、市中まで家來の者を付くるぞ』いひつゝ床几を立放れて左右を見返り、かこみし人垣解いて兩刀を還し與へつ、假屋の方をさして足早に立去りぬ、

稍ありて走來しは白須が家のもの三人、いざと立代りて浪人の前後に添ひつゝ、おくりいだせし墨田の繩手の一筋道、はや江戸の市中に入りし頃、前なる一人ふりかへりて俄かに會釋しながら、奥州南部に座光寺勘左衛門といふ御人もしや御聞及び御座るまいか』『御身達を付けられしは必定それと存じて、實は御尋問を待ち申した、その勘左衛門の一子勘三郎で御座る、仔細あつて國を立退き、いまこの廣き江戸市中に、かゝる縁者と申すは白須殿ばかり、さても今日は奇中の奇遇で御座つた』うしろの一人たちまち進みて聲かけぬ『主命で

御座る、いざ番町の邸宅まで御案内仕る』

第二回

草を分け石を穿ちて血眼になればとて、生涯むなしく逢はで不運の失望に泣くも人生、たよりなき百里の山河たゞ一息に通ふて、おもはぬ里にふしぎの縁をつなぐも浮世、神ならぬ身の人間萬事とは偖も言ふたりける、

白須が邸宅の奥まりたる一室、ちゝかに照す燈火は一しほ物の情を含みて、世に嬉しきは久しく逢はぬ他國の縁者、打解

けつゝ互に語る主客の胸に紙一枚の隔なし『なるほど誰も斯くては故國に居られぬ段々、さても遠路この江戸にまゐられての志願は』『おしつけながら、まづ御邊が許をたのむで身に相應の事もあらむかと』『もとより百萬石の米一粒に人一個と唄ふ諺の土地、まして其許ほどの意氣骨格、立身の道に事缺く筈もなけれど、及ぶが上の隴蜀には、あはれ諸侯にふかき亡父の存命』『なゝ何といはるゝ、伯父御は』『十六年以前、おもはぬ非業の死を遂げ申した』言葉もろとも顔見合して默然と差對ひぬ、

座光寺勘三おもはず膝を前めて聲を沈め『從兄弟とは申せ御邊とは今日の奇遇が初の見參、伯父御は曾て奥州下向の砌、六才の幼心にも見覺えて一段と懷かしう存ずる、定めて今は

御老躰の、いづれにか隱居めさるゝと心得しに、はや現世に在さぬとか、下人ならば知らず、れき〳〵上乘の侍が身に非業の死とは必定』『ずんと仔細が御座る、ついては哀れに勇ましき物語も御座る』『承はりたし、但し指す敵は』『同じ旗本衆なれど、まづ委細の順序は、この大江戸に三日月治郎吉とて前代未聞の俠客、世俗に申す不群の男達が御座つたぢや』『むゝ』『その三日月は、むさし一文字とて、これも聞えし六方臂突の婿で御座る、父子二代うちつゞいて亡父に目をかけられ、久しく邸宅へ出入いたし居つたが事の起因で御座る』『はての』『この治郎吉が三日月と異名を取りしは、十四歳のころとや、日本橋にて一人の武士と口論いたせしところ、武士またゝかに憤つてその腕首を捉へ、橋の欄干に重て、ずばと田樂

刺に小柄を貫き申した』『やれ大人氣なし、不器量ものよな』『武士は冷笑ふて、その小柄を汝に呉れると戯れしが、元來うまれて不敵の童、ゐいと兩腕曳いて紙の如く裂けたる掌に小柄を拔取り、サンピン待たと叫んで驚き逃ぐる武士を追掛け申したぢや、下司には天晴れ希代の男で御座る、かつやその兩掌に殘る疵痕が、三日月の如しと竟に異名を立て申した』

『いさぎよし、さても可愛奴』『このことを忽ち世上の風聞に上つて一文字の婿となり、いよ〳〵勇む荒男、花川戸に家を構へて數百の撥鬢奴を養ひ、果は裾を蹴つて踏出す繩緒の駒下駄に、二百六十餘の大名を物の數に心得ず、八萬八騎の旗本に拳をついて、敵といふものは夢にも許さぬ面魂ひ、一目に著るき異樣の姿は小唄に遺る深見重左が形見とや、板倉屋源

七が餘波と聞く水櫛の障子鬢に拔上げの大額、白銀の條針も天に朝する蟬折の髻を卷立て、されば、身材は六尺を拔いたで御座らう、まことに美事の大男、鬼とも組むべき猛者なれど心は花に宿る露ともいふべき優しの奴、情義のためには人一倍の泣蟲で御座つた』『あはれ見たかりしな』

その男、一年、飛鳥山にて春の花咲く中に旗本十七人、とんと下婢が大根きる如く、遣り申た、喧嘩の起因は素より多勢の曲のみならず、身分柄をも辨へぬ狼藉いたして町奴一人の手に十餘人の屍、上に對して恐れ多き不覺ありのまゝに詮ずれば、却て面々の家名にも掛るべき大事また一つには同味の情と、其ころ町奉行の亡父が配慮にて、治郎吉に五年の遠慮を申付けしが、おのが曲を掩ふて情義の裏を搔く人心、片手

打の裁判なりとて事むづかしう相なりし時、聞かれい、我こそ其時の敵手と名乗つて出でしは鬼若三次とて、三日月の子分のものに御座る、年輩やう〳〵二十一二、莞爾と笑ふて刑場に上りし姿は、武門にもあるまじき健氣さ、偖も斯樣の徒輩が治郎吉を親分と稱へて、江戸八百八町に二千人も御座つたは』『ふしぎの男で御座る喃』『さりながら、十七人の親戚緣者の若殿原が、本尊の後を追ふて總州に罷越し、我から佐倉在の大井戸村に忍びし治郎吉を、堀田殿の家老田原大角が家に欺誘寄せ、打果さむとせしが案外の敗亡、さん〳〵に惱まされたるが無念とて、みぐるしくも田原が虎の威をかりし野狐の工夫、治郎吉はじめ妻の菊かつは子分の小車源次と申す三人を强奪夜盜の罪科に落し、津々浦々までも嚴しき詮議の

貼紙を致した』『いよ〳〵人品を下げ申したな、腸腐り申したな、勿論のこと、腐りし卑怯の奸策に、憤るまいか天生無類の勇者、その貼紙を摑むで一日の雪中に治郎吉たゞ一人、亡父が許へ來申した、受けたる恩義やら思はずかけし迷惑やら、それこれの謝かた〳〵今生の暇乞、まこと男の骨晒すべき時節到來とて』『伯父御は何と召された』『このとき亡父は職を剝かれて寛齋と號し、もはや隱居の身にも捨難き可愛の奴が生死の境界、また最初よりの關係、人知れず思ふ仔細あつて治郎吉を邸宅に忍ばせ、私かに萬全を扱はむとせし苦心も水の泡、堀田殿より時の大老へ强盜を庇護ひしとの內訴に、今は亡父も亦いふべき筋ありとて、夜中に大老へ伺候せし歸途、無念や、死し申したは、まさしく闇討の敵それと明瞭なれど、

かなしや證據なかりし爲』『むゝ無論その後は何と、あはれ不束ながらこの勘三まかりあらば』『いや我とても同じ心外、されど大老が格別の内意に花を添へて、手は出し申さず治郎吉が謝罪との屠腹も制し、たゞ何事も知らぬ顔して涙を包む折から、こゝにかの小車源次なるもの、竊かに總州へ忍びゆき、加勢の大物たる田原大角を刺さむとせしが誤つて葉者を殺し身も深痍を負ひながら外に屍を晒さじと、死期の一命を十餘里の遠路、遁れまゐつて治郎吉が膝下で瞑目これも珍らしき奴、またこの江戸にある子分の徒輩は堀田殿の邸宅を火炎に包んで灰といたした』『さもあらむ、それほどの事躰たゞし治郎吉は』『治郎はその後、大老の邸内に呼寄せられ、願に依て美事の屠腹、我も折柄の客分として親しく見申した、享保九

年四月二十六日、當世にはあるまじき古式に倣ふて、夜陰の大庭に篝火をたき、修行門の設け涅槃門の幕捌、白絹の敷疊に水色無紋の死裝束、あはれ武士とても斯くまで晴れの最期は聞及ばぬ、治郎吉その中央に安座して鬢の毛も散らさず、亡父が形見に呉れし藤四郎吉光、九寸五分にて』『嘸や切りつらむ』『切り申したな、左の脇坪へ鋒先づぶと刺す折から俄かに搔鳴す琵琶の曲』『やゝ何として』『それが眞實に希代の邂逅、十四歳のとき田樂刺の小柄を呉れたる武士、盲目となつて琵琶法師と變じ、折しも大老の邸宅に逗留いたし居つたぢや』『これは一段あはれに存ずる』『治郎吉と互に名乘合ふての上なれば、法師も一世一代の琵琶、主は當代ふしぎの勇者、今もなほ耳に殘つて目に見る心地、享保年間またとなき美談で御

座つたは』

語りし主人の甲斐は思はず額の汗を拭ひ、聽居たる客の勘三は忘れて己が膝上を打ち互に差寄する肩と肩との擦合はむまで、言葉の花に勇氣を添へて物の哀れに心を泣かせ、はや更渡る其夜の秋の木枯も、熱せし二人が耳底には絶て音なし、

第三回

寛活小袖の伊達模様、いざ見に來よや花も咲くなり月も照る、正德享保の空に江戸の一名物と唄はれて、霜夜に似たる篠薄

かこむ白刄の其中を繩鼻緒の駒下駄からころと響かして、ふりきる六方みごとに通りし名譽の男も、死しては一片の白骨あはれ十七年の昔と見て、のこるは世上の語草、形見は大塚村の松蔭に往來ふ人の袖袂、ひきつゝ汲出す茶の味は流石なごりの澁い御手前、なるほど固いと諦めて誰も見上る浮世の掛行燈は『みかづきのかげ』

心して鳴れ入相の鐘、花や散るらむ春の日も暮れてけふ一日の草臥を休めむと、店を閉ぢ門戸を建てゝ夕餐も果てつ、枕とるには猶はやし昨夜なみだの讀續と、燈火かきたてゝ物の本を繰披げ、語るは女の蝶とて夢の翼に二十歳を載せし全盛うなづきながら聽入る母の尼は菊といひし嘗昔の餘波、女御后位が捨玉ふ深山の姿に引かへて、ちかき世俗の痩形伊達の

氣儘に育ちし五十路の果と思へば、物の哀れも一入まして心いぢらし、

あれ傳通院の鐘の音、數ふれば三指の捨鐘はや初更となりぬ、いざ寐むとする表戸を頻りに叩く音きこえぬ、於蝶あいと答へて引開れば、ぬッと入りて其まゝ上りきしは、このごろ音羽の町に聞ゆる武道の師範、間柄小太郎とて名にも似ぬ大男なり『母御は在宿か、いつもながら俄に逢ひたし』聲よりも顏みて引返したる女の蝶、畫ける如き美眉を顰めて一室に遁込みぬ、

『これ〳〵い間柄樣この夜深に慌たゞしい何の御用、花は散ても人はまた明日生命、どうやら今宵も無事さうな』やさしき言葉に針を包んで胸を刺せども、會釋を知らぬ我武者の慣、

主人の尼が顏おッと見詰めて冷、かに笑ひ『いや〳〵善は急げ吉は後るなといふ世上の諺、おしてまゐつた今宵の間柄は別人、また惡まれには來ぬぞ、よろこばれに來た』いひつゝ四邊を見廻しながら、座したるまゝに身を反して後手に物を探り『母御あらためて、この間柄を婿に持たぬか、いま遁込だ女の婿になりたい、まづ吉兆の結納として持參の一品、うけて貰はう』言葉もろとも右手に提げし風呂敷包よりぽと〳〵と黑血の滴るも道理こそ、打開ければ白髮の生首一級

一目にきやッと叫ぶべき女の身ながら、老ても三日月治郎が妻の末なり武藏一文字が生みし種、生育は山谷の國五郎とて火の粉の中で物いひし阿爺が手鹽、尼の身に似合ねど煙草の輪みごとに二つ三つ吹いて、おどろきもせぬ顏色なゝめに見

遣る目元の冷かさ、これ間柄様、狂氣なされたか、黑髪はおろしても法衣は纏ひませぬ、朝夕の念佛は亡夫のため親伯父のため、餘處の新佛を葬むる墓塲は持ちませぬ』『いや埋めてくれとはいはぬ、婿が持參の引出物』『婿とは誰の』『ゑゝくどい、こゝの婿、蝶が婿に』きくより尼はホヽと笑ふて膝すりよせ『いつ貴樣を婿にと約束、なるほど、去年の夏よりたびゝの御所望、天晴れ御武家の御器量人、お心は嬉しけれど、於蝶は義理ある女、亡夫が弟品の忘形見、この婆々か一存にもゆかぬことゝ、さま〳〵に御謝絶申した覺えはあれど』『むゝ一存にまかせぬ其身が又何故に一存で我を蹴つた、じたい本人に』『本人は嫌と申します』『おもしろい、母子もろとも振つたる其顏を、うなづかせる仔細きけよ、この首級の名は、

もと佐倉の家老、いま江戸の浪人、おぬし等が良人や父の生前に見たかりし一物』『ゑッ』『田原大角討つて來た』

間柄小太郎が推掛婿の結納とて、差出したる白髮の生首一級、その名を田原大角と聞いては流石の尼も思はず色を變て見張りし驚瞳、さもさうづ、さもありなむと憎氣の額越に冷笑ふて『なんと思ふ、婿に取らずばなるまい、氏素性は天龜のむかし、姉川合戰の大刀が末葉と生れて、年齒こゝにやう〳〵三十一、まづ傳へきく三日月は如何ほどの男か知らず小車源次どれほどの膽か知られど、間柄小太郎といへば今この江戸に盾なく武道の達者、戀なればこそ斯くの通り弱くも出るぢや、兩刀なげても不足なし、おもかげ見たくば町奴と成下つても構ひなし、二代の三日月治郎吉、この間柄に吳れまいか』

遠州濱名の鹽辛を舐るが如く、味にからむだ舌先まはして、得意貌なる小太郎の面躰に煙草の餘煙ふッと吹掛けぬ『ほ謝絶申します、いよ〳〵なりませぬ』

ふむンと鼻息に不審を打つて血相を變へ、かけられし餘煙の中より差出したる間柄が面は、をかしや踏損ねたる小田の蛙に似たり『小太郎が心中かくても居かぬか、あらためて最後の言葉を聞く後悔すな』『後悔より迷惑いたします、噫さても汚穢や、武士氣質は左樣したものか、下司なれど町人なれど、六方臂突は五月の鯉の吹流し、また青竹を割つたとも唄ひます、これ、耳があるなら後學のため、お聞きなされや間柄樣、お前達の田地でいふ不倶戴天とやら、主や親兄弟の敵ならば格別のこと、意氣と張地の間違より起つた出入の沙汰の上に

は、男を賣るものゝ慣ひ、敵手が死ぬか此方が逝くか、水に碎くる片割月、片方が缺くれば其まゝ二言といはず、事と品とによれば手を取合ふて酒も飲み、きのふの花と語るが常、生殺の蛇を扱ふ樣に、執念深いものでは御座りませぬ、江戸の男に怨靈ないとはモシこゝのこと、よう合點なされませ、また物の道理を粉にしていへば、お氣のどくやその首も、お前方より百段あがりし御武家樣、わづかの緣の旗本衆にたのまれて、善くないとは知りつゝも一諾千金どやら、あくまで亡父に向ふて立拔いた片意地、あたら大身むざと抛棄てゝも、をしまぬ心に今日このごろまでも浪人なさるゝ天晴れ人柄、敵ながらも譽めて居ました、もしや眞實に過去つた怨恨を忘れずば、女ながらも三日月治郎吉が後家、道理も知らぬお前

方の手は借りませぬ、うるさいとて今は取合ねど、筋をたゞせば江戸八百八町に男と名のつくほどのものは、むかしの菊が飾つた形見の簪、鏡にあてゝチンと鳴らせば忽ち関を作つて集りまする、これそのやうに目をむいても甲斐がないぞや、おたばたなさると塵がたつ、あまり力むと簀床が拔ける二本さしたが怖ろしくば團扇で煽ぐ燒豆腐、あれは慥かに八本町人風情の膳には怖い、切齒かんで睨まうより早く歸つて御寢なれ、夜が更けた妾も御無禮いたします』飛掛る隙もあらせず言捲つて、其まゝ起上る尼の裾、グット攫みし小太郎今は滿面に憤怒の色をあらはし、腰の大刀ひねりつゝ片脛たてゝやい待て

『この上に何の御用』驚きもせず立ちながらに振返れば、いよ

〳〵殺氣を含む間柄の面躰『老婆うぬ』『ゑゝ聞分のない、なんとなさるゝ、御執心の蝶には障子一重の彼方に立派な婿が寐て居ります』さすがは馴れたる嘗昔の一言、不敵の性根に時の氣轉を利かせて、危うき矢先に母衣をかけたる火急の手加減、おもふに違はず間柄小太郎あはれや忽ち腰を折られて心を奪はれ『その、その婿は何者ッ』、

『かしましい、その婿殿はこゝにあり、逢ひたくば逢ふて吳れう、まづ三國一の祝謠うたへ』障子さッと開けて悠然と現はれしは、奥州南部の浪人座光寺勘三郎、家傳の業物ひッさげて眼前に人なきが如し、

第四回

けふは四月の二十六日、またぬ月日に指をり數へて前宵一夜まんじりともせず、三才兒が正月まつやうに娯樂の今曉かけて、所天の命日に涙もこぼさず來たはこれ三日月殿、譽めて下され於蝶に天晴れ婿を取りました、妾の目からいふではないい、いづこの里に推出しても、器量なら骨柄なら男の中の見上げた男、たれに指一本もさゝせうぞ、仔細ありて浪人はすれど、氏も素性も奥州南部に聞えし名家の流れ、まして父といふ良人といひ、あれまでのほ恩になりしほ家の二代、今の白須様が繋がる血筋の縁を重ねて、すぎし二月の十八日に結

ぶの神の媒妁人、なんと不足はあるまいがの、あつてよいものか草葉の蔭に嘸や本望、のこる妾が身も安穩、めでたう濟んだ心の嬉しさを、おもふほどの自慢して源次さんにも傳へて下され、いふて叶はぬ事ながら、さても花婿殿の男振り、二人に見せたい〳〵と生あるものに對ふが如く、たつる香華の念佛に代へたる世話の手向草、動かぬ墓碑に身を動かして搔口說き、墓邊の草の根むしりつゝ大塚村に立歸れば、いざとて婿の勘三も立出んとす、あはれ露命の先後人間の幽明、いきたる我と死したる御人さらに甲斐なけれど、深き因緣の婿舅、まづ心ばかりの初見參に、放ちし箭は還るとも二たび見えぬ道をたづねて、いづこの誰に册かむ女の身、ましてや果敢なき我名の生涯、二十歳の今

日まて夢の浮世を蝶と過して、まことの母も知らねば父さへ染々こゝろに覺えず、義理ある人に養はれて名に負ふ三日月の影に育ち、うみの恩に彌増す母御の目鏡さら〳〵おろかならねども、果はいかなる男に添はむかと、さすが色づく蕾のころより朝夕の物思ひ、神に念じ佛にたのみし甲斐よりも、はるかに勝りし所天を持ちて妻と呼ばれ、世に一人の女よと可愛がらるゝ今日このごろの嬉しさ、小車源次が忘形身の婿には勿躰なしと、心に刻み身にしめて事ふれば、花の姿の色冴えて一入まさる花嫁御、それとみるより俄かに立ちて呼止めぬ『お待ちなされや其ままでは』

立ちながら勘三ふりかへりて何事と問へは、憎きならひは女の物いふ目元、別室へと誘ふて我居室に連行き『ゐゝ外聞の

わるい塲末でも江戸の町、いかに男は構はぬとて、このやうに寢亂れた鬢のまゝ』いひつゝ鏡臺の前に推据ゑて、背後より梳る手元を何に譬へむ、物の比喩にならねども思ふ心の優味は、黑革縅の甲冑に白き母衣かけたるが如し、義理と産生との二人が父樣の墓へ、このまゝお遣り申しては妾が濟まぬ、今宵の夢に叱られむといへば、勘三おもはず額越に見上けて笑を含みぬ『たわいなき女』

これでよし行き玉へと引止むる手に推遣れば、のこる笑を眉に寄せて立出づる勘三郎、おぼろ富士の編笠片手に持ちて腰間の大小ゆりおとし、太緒の藺草履に正平革の帶巾着、わざとならぬ兩肩小山の如く、おのづと光る髻の艶は漆に似たり、さても天晴れ美事の男、むかし懷かし今は戀しと見送る母子

を、見返りもせで反身にいづる門の口、ふッと風きる音して忽ち貫く大音聲『御用ッ』

第五回

雪か雲かと疑ふ盛花に風情なし、ちらほらと青葉まじりの梢に殘んの色香こそ、物の哀れはありけりとや四月の末の龜井戸に、一雨ふりて人も散りたる畦の野路を、爪皮の下駄に食ませて歩みゆく武士の一群、本所あたりの旗本衆が風に吹かるゝ醉醒かと見れば、かくても謹慎顔なる十餘人に守護られ

つゝ、一きは目立つ黒羅紗の長合羽に細身の粧飾大小、萌黄地の草薙頭巾を漏れて五十路に近き品位の面躰、我ひとり心地よげに打寛ぐは偖ぞ當時流行る大名の潜行とおぼえぬ、龜井戸天滿宮の社内おもふまゝに見歩きて、門前の葭簀かけたる茶屋に入しころ、いづこよりか疾歩に駈寄る二人の武士あり、もろともに編笠脱捨てゝ大地に跪きつゝ『恐れながら神田橋内の重き御方と心得、御遊興も憚らず御願の筋』湧出でし至急の休に憩ひし一群ずッと立上りて、取圍みつゝ四方に眼を配り壓ゆる聲に含む權勢『退れ〳〵何者ぞ、御潜遊に附入つて場所柄も辨へぬ失躰、おしつけの業まかりならぬ』『いや素より御叱聲は覺悟の前、たゞ浪人の悲しさは縋るべき袖もなく、ついては武士道の立難き仔細あつて、親のため一

大事の御願ひ』

武士道立難く親のための一大事とは、格外ながら聞捨ならぬとの一言に、立塞がりし面々はッと左右に開きつ、驚いて立聽く茶屋の男女を暫し追立てぬ、

頭巾の老躰そのまゝの床几に腰を動かして身を打屈め『ゆるす近う寄れ』言葉と共に二人の武士、膝行寄りて兩手を地につき『私儀は、小石川の奥、音羽町に住居の浪人間柄小太郎と申し、未熟ながら劍道師範のものに御座ります、これに召連れまするは門人田原主水とて、もと佐倉殿の家老職田原大角が一子、さる仔細あつて十八年以前に御暇となり、牛込神樂坂に住居いたせしところ、先月二十八日の夜、何者とも知れず家内の無人を覘ふて、父を打取り其首を持遁げたる曲者

これあり、のこる主水奴が心中おそれながら御推察を願ひ上げます、しかるにその曲者は當時大塚村に住居の浪人、座光寺某なるものゝよし訴人あつて一昨昨朝御召捕に相なりし段、重々ありがたく別して御上の御威光、一家擧つて拜み居りますれど、流石に兩刀の手前武士の面目、あはれ不倶戴天の仇たとひ一太刀なりとも仕りたき心願の主水、血の涙と相なり私へのたのみ勿論捨難く、助太刀後見は師弟の情義、何卒、御慈悲を以て座光寺なるもの、我々二人へ下しおかるゝまでは叶はずとも、いかなる便利をか御願申上げたく、三日三夜、憚りながら御門前に窺ひ、今日只今かくの仕合に御座ります』いひつゝ振返て目配せすれば、背後に控へし主水そのまゝ進寄りて『師匠より御願ひ申上げし本人、大角の一子主水

奴に御座りまする』父をうたれて無念の涙まだ乾ぬ目元を、拭ひも得せず僅かに振上げし面躰は、やう〳〵二十歳を越えし美形の優男、剃刀わすれて似合ぬ髭の生ひたるも哀れ深し、餘念なく小首を傾けて聞居し老躰、頭巾の中より今更ぢろ〳〵二人を見廻して『近ごろ神妙の願望なれど、公私の差別は予が一存にもゆかぬぢや、おつて好便利もあらば内々の沙汰を吳れう』いひつゝ靜かに左右を見返れば、會釋しながら三四人立寄りて師弟のものに對ひぬ『ありがたく心得て退つしやい』

馬乘物の行列を省いて心に叶ふ僅少の近侍を引連れ、思ふがまゝに悠々と野路の草を踏む心地は、雲井に放たれし籠の鳥にも優りて、たしかに一年の生命を伸せし今日のおもしろさ、

さても大名と金持は何とやら唄ふ下世話の文句、あれ見よ屋根が見ゆる、嗚呼うるさいぞや又うきよの禮義に戻るかと、打解て戯ながら神田橋を渡る折しも、はや暮掛る黄昏の足下、遣過して橋の袂より徒跣に駈出す一人の女あり、念力こむる涙の聲を川水に響かして『御訴訟申上げます、良人の一命にかゝる御訴訟申上げます』

一雨ふりて青葉際立つ龜井戸の興を破りつ、俄かに足下へ駈込みし二人の浪人おのれ潜遊をかまへて無躰の强訴と思の外、師弟うちつれて涙ながらの願意と聞けば、何とやらむ見好げに覺ゆるのみか、さすが聞捨ならぬ親の一大事、うい奴よ聽て便利を得させむと歸り來る折しも、今また良人の一命と叫んで走出づる女の泣聲、さても今日は不思議の日ぞ、人は知

らねど心の潔白、片耳はなるまじき我職分と、近ければ足を早めて邸宅の門前に召連れ、暮掛る黄昏に透しみれば、やう〳〵二十歳を越えし不群の美形、雪を欺く襟首を横に晒して亂るゝ鬢に憂をつもらせ、敷石に身を抛伏して片手に訴狀を捧げぬ『恐れながら御訴訟申上げます、妾は、大塚村住居の浪人座光寺勘三郎が内縁の妻、蝶と申しまする、寃罪によつて御召捕に相なりし良人のため、御法度を犯して願ひ上げまする』

第六回

浪人こそすれ我は佐倉殿の藩中に一二を爭ひし大身の果、生涯御暇の仔細も洗へば清き八十氏川、武士道の意氣地より起りし過誤なれば、田原大角たしかに屠腹かつや家名取潰しの御沙汰違背なしと、公儀への居濟は出せど世に有難き主君が情義を荷ふて、この星霜を十七年何一つの不自由もなく、無事安樂に送ると夢わするべからず、あはれ我は寄る年波の傾く餘算に影薄かれば、生前の御奉公は素より唯一目君前の首尾さへ叶はずとも、汝は今ぞ若草の萌出づる年輩、骨に刻み心に染めて文武の修行に油斷なく、せめて廿五の曉を迎へたらば、姓名を變じ身を潜びて仲間小者ともなり、重恩の家門に一身を捧げて蔭ながらの御守護ともなれよかし、所望が上

の願ひには、何事か一藩に聞ゆるほどの働き立てゝ、志づかに折を伺ひ正しく機を待ち、君が御居邊に縋りて父が本意を嘆き上げよ、不肖ながら御家には離れがたき田原の由緒、必ず長屋の端なりとも賜ふべしと、幼少のころより朝夕引寄せて說諭されし父が一言、耳に遺りて日夜片時の緩怠もなく、天晴れ早く二十五の意氣姿容を作りて、老の息あるうちに歸參の喜悅を見せ參らせむと思ひしが、天かや命かや、さても武運に竭きたりけり田原の一家、おもはざる曲者に仕てやられたるのみか、武士の身として首なき父が屍を葬りしこと、生々世々の怨恨いつの時にか忘るべき、涙こぼれむばかりに嬉しき恩師に心を勵まされ、相伴ふて當時權威の潛遊をうかがひ、師弟もろとも大地に頭を埋めて訴願を立てしかど、訴

人あつて一たん召捕られたる公儀の罪人、なんとして我々が私意の復讐に賜はるべきぞ、不俱戴天といふ仇は正く其れと知りながら、おめ〳〵と打屈まりて指さへ差れぬ悲しさ辛さ、噫抹香臭き無常の風は寺佛の軒とのみ思ひしに、うらめしや武士が兩刀の柄にも吹いたる我れ、髻切り容を變へて浮世を遁れいでむか、さるにても座光寺勘三といへる名の忘れぬうちは、惣ひ三衣の袖に汚して讀經の聲に曇を纏はむ、傳へきく三日月が後家かつは當の敵なる勘三が妻もろとも、程近き大塚村に住むとは知れど踏込む脛は不覺の上の不覺、みぐるしや父を打たれし無念に血迷ふて、はしたなき女二人を相手にせしと唄はれなば、亡父の尊靈に瑕瑾を負はせ舊恩の君家に笑を献るの道理、あゝ我ながら疎み果てたり田原主水當年

二十一歳、この身をいづこの里に抛捨むかと、深渡る燈火に己が影を怨みて唇を嚙む折しも、召使ふ下婢あわたゞしく閾の外に手を支へぬ『大塚村の住人座光寺勘三郎の母と申して、尼躰の老人參りまして、夜分ながら御意を得たいとのと』今昔ともに武道を立つる世の慣ひ、あるは家外あるは旅路に打れて、屍に咽喉を刺せし痕を見ば、同じ不倶戴天の仇ながらも追ふて復さむ白刃に晴あるべきを、我は子として一人の父を閾の内に死せしのみか、おめ〳〵と首なき骸を葬りしこと早や武運に竭きたる上、正しくその敵の所在を知りつゝ身は茲に手足を收めて、女々しき涙に暮るゝこと寔や三世の怨恨なり且や眼前無事なる怨敵の枝葉、取つて骨を挫き肉を喰はむも易けれど、田原主水あはれや血迷ふて當の敵を見遁し、

女二人に向ひしなんど唄はれなば末代までの瑕瑾、人知らねど心に恥かしと燈火の影に腕拱く折しも、座光寺勘三が母と訪來し言葉に耳貫かれて、いまの今までも天晴れ諦めたりし度胸むら〳〵と亂れぬ、おのれ、我よりこそ踏込まね彼より推して來ること、偖ぞ不敵の悪婆が本性あらはしたりと、思はず滿面に憤怒の色かけて大刀を引寄せ、眼を見張り兩肩いからして來れ來よと待つ容貌は、天下一の美男と聞えし水木辰之丞が扮せし不動明王に似たり、

案内につれて靜かに襖おしあけつゝ、閾に踵を重ねて半身を疊に据ゑしは、今更ながら三日月治郎が後家の尼、五十路を越ゆれど香や殘る昔の色を含みて、慇懃に兩手をつき垂るゝ額の頭上より、雷の落掛らむ如き罵倒の大音『おのれ勘三の

母か、田原大角が一子主水の眼前へ何と思て來た、進め〳〵寄れや老婆』血相かへて片膝突立し主水が顏を、驚きもせぬ尼つら〳〵燈火にすかして見上げ、おもはず兩眼の溜涙はら〳〵と落しぬ『あゝ偖も〳〵、お身大きう御成あそばした』案外なる言葉に女ながらも曲物いよ〳〵ござんなれ、重ぬる舌は斯世の末ぞと睨みつけて『ゑッ默れ、取るべき年を取つて身丈の長びしが何の不思議ぞ、おのれ風情に身の挨拶をせられうや、入らざる雜言吐かむより今宵うせたる用をいへ』『なるほど御道理と申上ぐるも恐れながら、斯樣なくては叶はぬ御憤怒を見るにつけ、おもひいだすは我他人ともに二昔のこと、亡夫治郎吉が御招ぎにより佐倉の御邸宅へまゐりしころ、父御はじめ江戸より忍ぶ旗本衆が多勢に取圍まれ、なんとやら物騷がしき仔細の眞最中へ、小車源次とて不束者が駈込で憚りながら人質に捕たは貴公樣、まだやう〳〵三才か四才いたいけの和子樣であつたもの、この尼も亡夫を慕ふて其の塲に居合はせ、白刃の中なれど、ちよッと抱いてあげ申したことも御座ります、定めて父御の御物語にも御存じなされうが、さても其時の和子樣が、かく御立派の御成長を、また騷がしき物の行違より御目に掛るといふは、誠に離れがたき前世からの敵味方』いひつゝ袖もて涙を拭へど、田原主水が耳に何の哀れの入るべき、ずッと立ち上りて大刀の柄に手をかけぬ『見ねば兎も角、眼前見ては許しがたき老婆、覺悟せよ、まこと婿に同心ならずとも、おのれも聞傳へし三日月の後家、不運と諦めよ』いふ顏を靜かに見上げて片頰に笑み、

『お騒ぎなされますな、五十一の尼が身に針一筋も持ちませぬ』五十路を越ゆるこの尼が針一筋も持たぬ身に、拔けば人斬る大刀ひねつて急込み玉ふは見苦しや、憚りながらその狼狽し性根にて所詮まことの敵を知り玉はぬは無理ならねど、さりとては御若輩さわがしきばかりが能になりませぬぞ、物に仰々しいは武門第一の瑕瑾と御存じなきや、これは三日月治郎吉が形見の後家、お靜かになされませと冷笑を含んで飽まで寛々たる躰に、血相變つて心頭むら〳〵の田原主水おもはず片膝つきしまゝ碓を踏むが如くに進寄つて、おのれは人か鬼かと尼の面躰ぢッと睨みぬ、

『さすがは大膽不敵の下司に連添ふた女の果、木偶さへ罪に伏して白狀すべき今この期に臨んで、恥らず顏なる佛面つくる

膽太さ、されど遁れぬ場所と觀念せよ、元來當の怨敵を外して枝葉の女風情に渡らぬは、士分の心に叶はずと思へばこそ、さるを眼前こゝに推來つては許しがたき亡父への手向草、根を掘つて土を翻すが子たる本心何處を不理と吐すや、血迷ふたか死後れたか』いざといはゞ咽喉笛摑んで胸に白刃の間一髮を、瞬目もせず主水が顏ぢつかに見返して莞爾みぬ『血迷ふたとは貴公樣のこと、さらでも浮世に不用の老が生命一個、何を名殘に惜みませうや、たゞ涙に曇つて御眼力の違ふた笑止さ、一つには亡夫三日月が過ぎし心を誤られたる悲しさ、二つには婿の勘三が神もつて寃罪の申開き』『いや聞かぬぞ老婆、主水が眼力よしや曇るとも、傳へきく三日月が潔白を埋るとも、現在わが父を打つたる座光寺奴、訴人あつて召捕の

外に誰を覘はむ、主水當年二十一歳、三歳兒と思ふか下女』『御ふびんや三歳兒より劣りしと存じます、まづ父御を打つたは婿の勘三といふ、その訴人は誰何と思召すや、今昔ともに絶ぬは世にある反間讒言、仔細を知るべき訴人について詮鑿の上、いよ〳〵それと極目をつけば兎も角、たゞ召捕られたが證據とて御騒ぎなさるゝは近ごろ不出來の早計、もし人違ならば何となさるゝ、おいたはしや草葉の陰の父御は不覺の子を持つたとて、さぞ今ごろは御歎きなされませうに』『やッおのれは〳〵、我のみか亡父の名まで辱かしむその舌』『お持ちなされ、この舌一枚で貴公樣の孝不孝が分りますぞや、只今その訴人の名を』『むゝ早くいへ』『おそく申しても名は同じこと、その訴人が全く父御の怨敵、二惡を兼た其奴は、取も

直さず貴公樣の師匠』『ゑッ何といふ』『間柄小太郎と申します』

第七回

江戸の塲末、練馬の出口、品下る鄙にはあれど三味の音じめの音羽町、賑ふ宵の景色に引かへて、更渡る大塚村の常燈影暗く、傳通院か護國寺か三更の鐘に犬の遠吠を合して、花里には欲睡氣に唄ふ投節の聲も、かれ〴〵にきく冬の夜寒の霜路を前後見廻して駈行く一人の男あり、あるならひ戀に窶れし迷ひの煩惱か、かわいや色に怨恨の成れの果かと見れば、

黑布の頭巾に面部を包んで闇をも透さむ眼力するどく、空照る星を便りに忍んで運ぶ臂の邊りより、一きハ輝く兩刀の鐺きら〳〵と澤邊の螢を欺き、走出してハ後ふりかへりて暫し打屈み、駈戻つてハ前路を通して物思ふ躰、いづれ曲物とハ知れど折々躊躇ふ色に、闇ながら無念口惜の色を含みぬ、

音羽町の片外れ、塀下あゆむ百姓町人に物言掛けて竹刀の拳を試し、門前窺見の丁稚野郎を捕へて泣聲たてさせ、あれハ人喰武道の住む家と、噂に高き間柄小太郎が邸宅、出角の土塀覗ふて松が枝を傳ふハ、かの黑頭巾なる怪しの男、霜に踏占むる足塲いくたびか据變へて、やッともいはず其まゝ塀内へ飛入りぬ、

松の葉を騷がせ門守る犬に吠られながら、する〳〵と傳ふて

飛入つたる曲物、いづこより忍びけむ、雨戸一枚も繰明ず身は奥の一室の此方に現はれぬ、

天井の横欄間より主もろとも眠れる燈火の光輝、ぽッと漏來る襖に身を擦寄せて、打屈みつゝ窺ふ息は抑ゆれど、抑へがたき胸間に無念の涙や籠りけむ、但しは怖るゝ敵に氣を奪られて爪立つ足を狂はしけむ、おもはず撞と當りし音に南無三、今は甲斐なし生命一個と立上りざま、あら〳〵しく襖蹴放ちて躍込めば、おのれ然知つたりと敵の跳出づると思ひの外、立廻したる屏風に音もなく燈火の影閑靜なり、

さては平生の大酒に飽まで醉臥して、前後も覺えぬ熟睡は天の賜物と、屏風搔退け燈火を遠ざけ、大刀するりと拔放ちて間柄小太郎が枕を蹴れば、驚きもせず、兩眼くわッと見開い

て打抑ぎたるまゝ『何者ッ』　聲もろとも被れる夜具の中より白刀を差出しぬ、

さすが聞ゆる武道の達者に用意せられし上は所詮の業、はッと後て氣を拔く間一髪に、ころ〳〵と轉びいでゝ一室の隅に身を起し、　構へし先鋒は此奴が得手の手練に青眼といひぬ、

『江戸に楯なき間柄と知つて來せたか白痴奴』

驚きながら曲物も今は絶躰絶命、　大刀ふりかぶッて兩足を踏張り、　ゑいとかけたる聲に間柄は忽ち忍びの大音『覆面取つて這蹲れ、　おのれが十年以來の師ぞ、　太刀の振方足場の寸法、田原主水と見たは僻目か』『察しの通り田原主水、　師弟の義を破つて斯くの仔細は多言に及ばぬ、　胸に問ふて覺悟めされい、強弱は平生の業、　凝つたる一念に何の差別あらむ孝子の一劍

斬れぬと思ふか直接』　天晴れ健氣に身は捨つれど、　やッと躍込得ぬ悲しさは、　我から我を勵ましてザリ〳〵と進み寄るに、間柄小太郎大口あいてカラ〳〵と打笑ひぬ、

心は知らず業は江戸に楯なき武道の達者、　ましてや十年以來汗水を絞つて飛廻ればとて、　竹刀の革端も屆かぬ師匠の間柄小太郎が、　身を片隅に寄せて平生あくまで自慢の業物を、　比類なき得手の青眼に構へたる猛勢なんとして破らるべき、いざ來よ主水それ打入れといはれながら、　あたら必死の孝子が一命なげこむ寸隙もなく、　無念の頭上に大刀ふりかぶッて血眼を張りしまゝ、　身躰こゝに谷まつて立往生の哀れさを、　さもあらむと冷かに笑ふて見上ぐる間柄、　上唇を舐めて左手に顧髯なでつゝ『なんのために振被つたる白刃ぞ、　打込まぬか

主水、虎と見て石に立つ矢の已れが念力、かゝらむほどは、孝子といはさぬ道理を諭すまでもなし、いづこの誰に教、唆されて血迷ふた、師弟の義を抛つて後見の我に刄向ふ失躰、一聲の下に斬るべき奴なれど、父を打たれて心の亂れし可哀さに、一命助けてくれる、白刄を捨てゝ三拜せよ、たゞしこの間柄を仇と覗ふの證據ありや、十年撫育の汝が父を師分の我として何のために打つべき、よし打つたるにせよ、その間柄まだ何がために汝を連れて權威の潛遊を窺ひ、厚祿にも屈せぬ膝を土に埋て歎願すべきや、白痴奴狂者奴、退れ蹲れ、猶豫せば取つて挫ぐぞ』怖るゝ敵にあらねば飽まで思ふまゝの言葉を吐いて、やゝ現はせし憤怒の色に額を染むれば、元來うまれて卯の毛の邪念なき田原主水、いよ〳〵迷ふて躊躇ひ

ながらも殘る孝子の念力『それほどの道理を辨へぬ主水と思はるゝや、さらば動けぬ證據』『いふまでもなし、その證據あつて遁るゝ道なくば、武士道の不運、よし眞實の罪は犯さずとも、汝が孝に免じて討たれくるゝは』

十年撫育の師恩は父を打たれし一日の怨恨に代難し、雲泥相違の强弱は眼前の白刄を退くに由なしと、凝つたる念力に身を躍らして踏込む〳〵と焦心ども、悲しや寸隙もなければ立往生の苦しき息ほつと吐きつゝ、いたづらに血走る兩眼怒らして冬の夜の大汗、たら〳〵と額際より流るゝ睫毛を瞬目けば、さもあらむと冷笑ひし間柄小太郎やつと掛けたる聲もろとも、あはれや主水が五躰は忽ち膝下に組敷れぬ、背に磐石の膝頭推据て白刄を拏取り、襟首の邊りに罵倒の息

ふつかけて、忍びながらの怒聲を耳朶に張貫きぬ『主水、もしこの間柄が眞實おのれの父を打つたる敵とすれば、ふびんや、かくなりし無念を何とかする、うらみ重る怨敵に組敷るればとて、今更ら婦人に等しく舌根嚙裂て即死もなるまじ、さればとて此まゝ跳返さむことは、おろかや人間世界にあらぬ轉倒、まづ、おのれが眼前の決心を吐けよ、それ聞たる上に二度の教訓くれるぞ、白痴奴、いかに若輩とて武士の二十一歳は素町人の四十智惠、さるを老若二人の女風情が口車に乗つて、大恩の師に敵呼はりするのみか、夜陰の不意を劒にかけむとは前代未聞の曲物奴、骨身に徹へしか、間柄小太郎が折檻と思ひ誤まるな、草葉の蔭なる己が父の訓戒ぞ』いひつゝ襟首の骨も碎けむばかり、ぐッと絞付くる手練の業に流

石の主水たまり得ず、苦しき聲を澁らして兩眼の涙を疊に濕ほし『このまゝ一身捨つるとも、今あぐる證據の言分なくば合點仕らぬ、恩師とは申さぬぞ』『おもしろい、その證據を見せよ、いふことあらば聞取りくれるは』聲と等しく引起すと見れば忽ち撞と拋出しぬ、

拋出されし田原主水、雪の額に梨地の磨傷おひて亂るゝ髪を振上げ、無念の兩眼すゑて間柄が面躰おッと見詰めながら、懷中より取出したるは刀の小刺、赤銅七子に青海波の浮模樣『これを、この小刺は何人の所持で御座る、日夜教をうけし師の大刀、柄絲の卷立は幾筋までも見覺ゆる主水が目に、父うたれし時より小刺の變りしは一つの不思議、もしや大塚村の某が家に血汐の風呂敷もろとも、さる仔細あつて置忘れ玉は

ざるか』『いや知らぬぞ、無銘ながら刀は父祖傳來の業物、小刺は初代後藤の作にて刄は天正祐定と、平生より誇りし我大切の言葉をきゝ、盗みし奴あらむと今日このごろの詮議最中』『はて物盗むほどの大膽なる奴が、さほどの名刀を捨てゝ外し難き小刺のみとは猶更ら不審、さても勘辨用捨の盗人よ、また一つ、いつぞや御酔狂の戯れに何といはれし、四方よりの結納を退けて間柄が今までの無妻は、この近傍に思ふ女ありとの一言、その女の名を蝶とは申さぬか、母は三日月の後家、もとの名を菊と申さずや、いやさ蝶の婿は此ごろの新人、座光寺勘三と申さずや、その勘三に取挫がれて右の肩先に鐺の打疵たしかに一月不滅の手加減、ありとは虚言か憚りながら念のため拜見いたしたし、また最初、老若二人の女風情が口

車に乗つてとは、ぶたい何人との御推量にや、田原大角討つたは奥州浪人座光寺との訴人は誰人に御座る、これも御承知あるべき筈かつや助太刀後見を賜はるほどの御侠義に、その訴人を見遁し玉ふは何たる不似合ぞ、なほもこの他に種々の證據あれど、流石に十年日夜の恩師、主水が口よりは申兼ぬる、胸に問ふて少しは恥辱を思ひ知られよ』いひつゝ思はず膝を進めて、兩の拳に疊を叩きぬ『ゑゝ御未練ぞや、卑怯なる御心底いたはしや、我たゞ獨り斯く夜陰に打入つたは、なほ忘れがたき師弟の義を思ひ、十年の恩に報ゆる主水が厚志、師を殺せし大罪と世に唄はゞ唄へ、我には父の仇を復せし本分を抱いて、あとは直ちに屠腹の覺悟、さても〳〵呆れたり、この主水を前代未聞の曲物といはるれど、師が心は何といふ

べき、女一人、さかも良人ある女一人のために、十年の恩を被げし弟子の父を打つて』いひつゝ今は言葉もなく身を震はし、ぬッと再び起上りし躰に間柄小太郎すッと飛退ながら、かくても改めぬ不敵の奸胸を叩いて家内に響けの大音聲『血迷ふて恩師に刃向ふ大罪人、手捕に取つて骨を挫ぐぞ覺悟せよ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

まこと不倶戴天の仇は必定それと極りぬ、さらば青天白日の下に泥脛踏込で呼はるとも、武門の慣ひ子たるものゝ一念、いづこの誰に批判を打たれて世に憚かる筋はあらねども、悲しや指す敵は正しく十年の恩師なり、さかも我ためにに百千倍

の大剛なり、よしや死人に等しき熟睡の胸間に打跨ぐとも、恩仇こもゝ心に滿ちて湧出づる涙の我、なんとして思ふがまゝに白刃の働くべき、さりとて今は片時も斯世におくまじき間柄小太郎、たゞ人されず打入つて運を天にまかさむのみ、あはれ一旦の戀に誤て世上にあるまじき鬼とはなれど、元來さるほどの悪人ならねば、動けぬ證據を重ねて目鼻に突付け、師弟の義を破つて斯くの主水に罪はあるまじ、いかに〳〵の果には偖も涙人ながら由緒ある武士、こゝろよく我白刃を受くる迄はなくとも、みづから恥ぢて燈火ふッけし、見られぬ顔を赧めて腹掻割かむは定のうちと、尚殘る師弟のよしみ、人がましく思込んで忍び入つたる間柄が寢屋は、案外の地獄なりけり鬼畜に劣らぬ不敵の本性、今は十年の夢さめて呆れ

果たるのみか、忽ち取挫がれて悪口罵辱さん〳〵に頭を打たれ、殺さぬが情義と門外へ抛出されし無念、ゑッ叶はぬまでも取て返さむと思ひしが、おもひきや斯ほどの悪奸に向ふて孝子の一命捨てむは勿躰なし、いかに武勇の彼奴なりとて正に敵せぬ邪悪の面皮容赦なく美事に剝いでくれむづと、血の涙を呑で走歸つたる田原主水、その夜の明るを遅しと奉行の門を叩きぬ、

第八回

一片の義侠過まつて父は非業の横死を遂ぐれど、時の大老宿伯が肝煎て無事に通し旗本の上乗、かつや父祖にもまして世にいでたる今の白須甲斐、小普請入の若輩より一足飛に御側御用人となり、大名歴々をも指頭に動す權位の地にありながら、身より放てる光輝にあらず辱くも天下の役柄と、いよいよ進みてます〳〵謙る名譽の人品、おのづから八萬八騎の物の手本に呼ばれて、天晴れ父に劣らぬ遺風ありと世上の噂たかく聞えぬ、

その白須甲斐より一面もなき浪人の我を呼寄するは、吉か凶か、一藝一能を惜みて士に下るの美風ありときけば、江戸三界に盾なき武道の達者、定めて音にも聞きつらむ然らば會ふて面見知られむも身のためと、おのが高慢の鼻に兩眼眩んで

心に莞爾む間柄小太郎、衣服大小けふを晴れと飾りて白須が邸宅へゆけば、いざ此方へと取次の慇懃に案内され、奥ふかく入りたる小書院の待遇さては凶事にあらざりけり、あはれ草莽の勇士こゝを便りに傳へて將軍の耳にも入れかしと、まつ間ほどなく立出でし主人の甲斐を見れば、まことに身を立つる三十と惑はざる四十の間の年骨格、錦を纏ふも分に過きざる當時の出頭ながら、わざと紬の誰袖に切落しの小柄凛として古風を忍び、目尻と共に引絞りたる水鬢に拔上げたる額際、おもむろに坐を占めて會釋の片手を伸しつゝ『ずッと進まれい、お進み下され間柄殿、主人の甲斐で御座る』いひつゝ眞正面よりぢろりと見遣る目元の怖ろしさ、鬼神の緩怠も許すまじく覺ゆれど、おのづと笑を含む唇端の愛嬌は、

野末に打臥す腐れ婆々をも介抱せむの美趣あり、『お召によつて罷りいでたる音羽町の浪人、間柄小太郎奴に御座りまする、まづ初の御見ながら、御きげむ美はしく』『これは〳〵御挨拶いたみ入る、かく唐突に御招き申したは餘の儀で御座らぬ、聞けば名士の末葉、近ごろ江戸に鐵石を知られぬ御太刀筋とか、かた〳〵御會ひ申しておかむと存じて、聊か御酒まゐらせうため』

世にいふ天下直參の上乘、ましてや當時出頭無二の白須甲斐が、案外の優しき言葉に間柄小太郎おもはず莞爾みて、あゝ隱せど現はるゝものは身にうけたる藝能、草叢の浪人たちまち一足飛に毛槍を立てゝ大道を歩むこと、たゞ此機にあり得たり遁すまじと思へば、いよ〳〵媚を呈する盤大面の嬉眉、

口を尖らし目を斜めにして傳へきく主人の寛大を稱し、飛鳥おつる權威を怖れみ賞へつ、これは〳〵恐縮々々と我を忘れて、いつしか小膝を動かし席を進みぬ、

さてこそ曲物その手に乘るべきかと、おもふ深水に引入れて心に笑ふ主人の甲斐、なほも飴を舐らして太き襟首搔撫でつゝ『いかに間柄殿、其許ほどの武術を持ちながら、太平の世に生れし甲斐なさは、立身まゝなる可惜ら生涯を空しく竹刀の音に送ること、をしきもので御座るよ喃』『これは仰せなれど、いづれ武道の師範をいたす身、誰にもせよ、少しは眞實の心得なくて叶はぬ儀で御座れば、犬猫の外に、憚りながら隨分生身を斬つたる覺悟も』『なに、あるとや、それは一段おもしろい、おかし然もあらむ、さなくては徒らに舞踊の師匠

も同然たるは太平の武術、むゝなるほど、さて〳〵太刀の斬味は老若いづれが、むづかしからうや』『さればで御座る、まづ肥太りて三十前後の膏乘つたる奴は、物容るゝ袋を石に叩付けて破るが如く、ぽてりッと音すれば紫の血煙もろとも美事の眞二割、ずんと小氣味よくは御座れど、皮肉たるんで血色衰へたる老人は、身躰苧殼の如く痩せたれど、冴たる手に刄金よき刀を持たずば、なか〳〵心にまかせぬもの』『むゝさやうかな、まづその若きものは幾人ほど手にかけられしぞ』『十七の春、父より讓られたる無銘もの、業物とは父祖より傳聞いたしまするが、心元なさの血氣にまかせ、諸人に難儀をかくる惡黨の非人輩六人と、二十三のころ、東山道の旅路に口論いたせし武士の相手四人、やむなき仕儀に拔合ふて、四

つの首を殘さず』『ほゝう天晴れ手際、見たかりしよな、さて今いふ老人の斬味は』『老人は僅に一人より覺悟仕りませぬ』『それは如何なるものを武士か町人か』『やはり武士には御座りますれど其ものが』『なんと致した、手剛き奴でがなありしか』『憚りながら間柄奴いまだ手剛き敵には出逢ひ申しませねば』『さらば斬味は』『よく斬れました』いふ顏を主人の甲斐ぉッと見詰めて兩眼に冷味を帶び『斬れもせう筈、それは寢首であらう』『ゑッ何と、なんと仰せらるゝ』『こりや間柄、おのれは田原大角討つたであらう、そこ動くな』聲と等しく主人の甲斐すくりと座を起ちぬ、南無三と驚く間柄小太郎、いのち百年目と血色變へて膝立直さんづ横面のあたり、癇癖の甲斐ぉたゝか蹴上げて振返りざま『畜類奴、眞實の武士が御足ぞ、

ありがたく心得よ、世にいふ獅子身中の蟲を越したる奸惡の腐男、我を誰と思ふ、おのれが罪惡は明白ぞ』

第九回

運の神舞來つて頭上に宿り、浪人の間柄小太郎が一足飛に毛槍をたつる梯と、內心の嬉び顏色にあらはれて送りいでし門人に問はれし時、人の能も身の程の分相應こそあれ、あゝ持つまじきものは世にかくれなき藝の妙ぞ、草葉の蔭に轉がる氣樂の境涯も、けふ一日の名殘にやならむ偖うるさしと、お

もふまゝの廣言吐いて立出でし我、今更おめ〳〵と泣面さげて歸らるべきや、かう〳〵の甘言に引入られて斯の耻辱に逢ひしのみか、この横面を起蹴の足にかけられしとは、年來飼馴れて門守る犬にも語られぬ心外、それ先生の御歸り御出世の祝酒は用意仕れりと、何事も出過ぎて早き彼奴等の歡迎に逢はゞ何と答へむ、我ながら千枚張の面の皮を燒拔いて恥かしの火や燃出でむ、さるにても白須の狸奴、釋迦も知るまじき我身の舊惡素性より、田原大角の寢首を搔きし一條、かつは其子の主水を欺いて龜井戸に義俠を賣りし事の仔細、あれまで手に取つて知る如きの委しきは必定たゞならじ、大塚村の尼女が駈込みしか、すぎし夜に逆折檻を吳れたる主水の泣込みしか、いづれにせよ入らざる他人の横道より無用の敵呼

はり、もしや彼塲に白刄の閃くことあらば、武道に盾なき間柄が死物狂ひ、天下の出頭旗本の上乘を冥途の道伴と思ひしに、さすがは甲斐の才物わが術に乘らで、さん〴〵辱しめたる上おとなしう送り歸すは、世にいふ大家の放し討とや、必ず門外に忍んで待つ奴あらむと思ひしが、これも幸ひの無事なりし今日の首尾、さては我面魂に怖れて萬事の用意を解きしものならむ、いざこの上は油斷なるまじき間柄の身上、おもしろき逆樣の工夫もがなと、まだ宵ながら人影淋しき番町より、かきくもる冬の夜寒の市ケ谷見付を過ぎんとする折しも、松の小蔭に三四人の打屈む躰、石垣に身を摺寄せて息を殺しつゝ此方を見透す躰、さすがの間柄小太郎はッとして思はず足を止めしが、元來あくまで不敵の奸性、業は素より江

戸三界に響き渡る達人、五六歩踏戻して大刀の鯉口すッと寛げ、大の咳拂ひ一息、やゝ中腰に足場はかッて進みゆきぬ、あれまで我を深水に引入れながら、無事に歸すは呵しきものと思ひしに、まことなりけり白須の狸奴、さるにても他人ならば天下の出頭たちまち手込に打んとすべきを、わざと放ちて已れが姓名の係らぬ場所へ釣出し、後腹病まぬ謀計に荒膽ぬいて後のことゝは、いよ〳〵才物ゆめ油斷なるまじき敵なから、本願いのりの主水奴は素より一瞬の手のうち、たゞの人間三疋四疋車輪の助太刀働くとも、志らずや刃は重代の業物ぬしは當世ならびなき間柄小太郎、いで逆樣の辛き目みせて追歸し、肝煎顔なる甲斐奴に蟹のやうなる一泡吹かしくれむと、六尺の身を固めて足場を踏占めながら『景清これをみて〳〵、もの〳〵しやと、ゆふ日かげに、打物閃めかいて切てかゝれば、こらへずして双向ひたる兵は、四方へぱッとぞ遁にける』景清が謠曲の一節を、中音に謠ひながら四邊に眼を配り、見付の石垣際を曲り行かむとする背後より『間柄小太郎まてッ』聲と等しく一人ぬッと飛出でゝ躍りかゝりぬ、さきッたりと身を洗めて拔放ちたる間柄が躰は、秋の夜風に木葉の散る如くヒラ〳〵と横に飛で、ひたと石垣に身を擦寄せたるまゝの兩足踏張り、からゝと笑ふて響と叫んだる大音聲『ゑッ夜盗奴强奪奴、寄らば微塵あら呵しや』『狼狽るな奸惡の田夫奴、敵の名を呼ぶ盗賊あらむや、田原主水ぞ』空照る星を便りに思ひきッたる一念の大刀ふりかぶッて、ゑいやッと上げたる必死の聲もろとも、躍込みし白刃の下には流

石の敵も分割と思ひの外、あはれや一太刀の打合ふ音もなく、
撞と抛出されたるは主水なりけり、
それッと掛合ふ黒頭巾の武士三四人、ばら〳〵と走りいでゝ
名乗も上げず白刃も拔かず、たゞ間柄が面部を臨んで雨の如
くに小石を抛付けながら、『田原氏、田原氏』
いふにや及ぶべき、むくと跳起きて又もや太刀を振被り、馳
向はむとする哀れさに今は堪らぬ四人の助太刀、ずらりと一
齊に拔いて蝗の如くに飛掛りぬ、

第十回

年若く腕おぼつかなけれど父を打たれし無念の一心に、身を
捨て打込む太刀隙間なければ必定平生の十倍ならむ、まして
や無縁の他人ならば早りて自然の油斷もあらむが、さん〳〵
欺かれて掌上に弄ばれし口惜の果、現在十年の師に向ふと思
へば、餘處に知られぬ必死の主水、やはか仕損ずまじ、かつ
や助太刀に附けたる三人も、尋常の敵ならば易く十人に向ふ
べき奴、かれこれ合して四本の鋒先に火を揉出すならば、鬼
と唄はるゝ間柄とて嘸や骨折れつらむ、吉凶いかにと待つ程
もなく馳歸つたる三人の家來、等しく居室の此方に兩手をつ
いて息切れつゝ『御前』いふ聲に白須甲斐おもはず坐を乘出
でゝ燈火さしむけ『むゝ歸つたか大儀であつた、扨て〳〵彼

奴は』

おのれ等三人にたのむぞ隨分働けと、相傳の主に言葉を下げて言はれし三人、おめ〳〵生て歸りし面目を踏潰して、額の汗に疊を染めながら『みごと、に取遁したる御謝罪かた〳〵三人打揃ふて生涯の御暇を賜はるやう、只管ら願ひあげまする』『なんと申す、取遁したか、それにまた、生涯の暇を吳れとは』『恐れながら申上げます、なるほど彼奴は聞きしに勝る手練の早業、若輩の田原主水かけても及ばぬ强敵、これッと聲を合して我々三人、前後より驀地に打入つたる甲斐もなく、彼奴が身躰宛から飛鳥の如く、去かも兩刀の非凡業に踵は地につかず、始終飛廻つての働振り、いかに三人あせるも打込む隙なく、無事息災おめ〳〵と取遁したる段、まことに年來

の御恩に背く祿盜人、去ばらく御成敗の御手を許されて、このまゝ浪人のほど願ひあげます、今更ら己が未熟を粧ふに似たれど、われ〳〵三人、その塲に屍を晒す本意ならば如斯やみ〳〵と無事に歸參は仕るまじきが、何を申すも、白須の家來と後の批判を恐れ、一つは又、田原主水を打たせまじき心に引かれ』『むゝよし〳〵、主水は無事か』『無事に御座ります、あれほどの奴が、我等四人に一寸の疵も付けざりしは、いよいよ以て冷罵の致方、この無念は三人浪々の上、心安く再び打入つて死物狂ひの働きに』『いや成らぬぞ、天來の强弱は代難きもの、其まゝに捨置け〳〵、また善き思案もあるぢや、さるにても彼奴なか〳〵の腕と見ゆる、あはれ座光寺勘三に向はせたいな、あれならば必定間柄といはせまじ』いひつゝ

何事か思案の躰、やゝありて礑と小膝をうち『三人近う寄れ』

第十一回

心は人間の腐埃なれど業は天晴れ敵なき間柄小太郎、江戸の片外ながら聞ゆる音羽町に一町四面の塀を構へて、四百にあまる門人の出入朝夕に絶間なく、やッとうの掛聲は窓を漏れて往來の人の足を止め、打合ふ竹刀の響きは腹に徹へて馬の脊でくる大根を覆へし、堅書の大看板を許されたる七十七の町道場中、江戸隨一の名譽と呼ばれ塚原小太郎の再生と呼ば

れ、諸國より入込む武者修行も鬼門と怖れて立寄らぬ權勢に、その名は鬼神の如く天狗の如く聞ゆれど、先生元來ひしやげて低き鼻を奈何せむ、高きはいよ〳〵募る心の自慢に胸の惡性、三國一の富士山を望んで呵々と笑ふ面いと憎し、

十八間四方の浮張道場に二疊の壇を構へて、左に摩利支尊天を仰ぎ右に流祖の塚原卜傳が畫像を掛け、その中央に磐石不動、むんづと坐したるは當場の大先生間柄小太郎、どんぐり眼を見張り牛骨の兩肩いからし、段小倉の袴に尺五の鐵扇ずんと推据ゑながら、三寸の舌頭に石火稻妻の間一髪を見分る躰、なるほどこの意氣に惡奸の魂魄打込んだる曲者さても怖ろし、

間柄が左右に居並ぶ十四人の徒輩は、五年以前に目錄終て秘

術皆傳に間近き門人、平生は師の代劍ながら今日は月に兩度の大仕合、本尊の出座を怖れて雀の口を閉ぢ梟の目を注ぎぬ、さて道場の板間には夢の豪傑すぐッて三百人、左右の陣場に分れて股鞍の坪を叩き眉庇の出額をうち、思はずあぐる切聲やんやの其中に、磯邊ならねど今や源平兩軍の一騎うち、はれの勝負に待つた待たぬの推問答より、三寸呼吸の息合に辻つて轉ぶ團子流、ぼか〳〵の眞向に眼眩んで平駄張る味噌付流、入らざる空に躍つて立つ足を挫く田樂流、飛出すや否や忽ち遁込む氣轉流、道具外れを打たれて痛いと呼はる正直流あれば、組伏せられて人殺しと叫ぶ滑稽流、首を取られて武者振付く幽靈、小手を切られて打返す亡者流、竹刀かついで向脛を蹴上ぐる馬流ひんと誇り、胴を摑んで咽喉笛を引搔く

猿流きいと嬉ぶ、いづれも平生の練磨を重ねたる離業に、さて〳〵末たのもしからぬ軍勢ども、いざや一息いれむと水を飲み腕を撫づる折しも、容赦なく道場の入口引開けて呵々と笑ひつゝ、ぬッと首さしいだす男あり『夏ならぬ冬の日に蚊柱たつる人々、いち〳〵竹刀に白刃をひかば何とする、そもや當場お山の大將は誰殿やらむ、御意得たし旅の浪人で御座る、本手の武道に案内いらぬ天下の習慣、まづ御免なれ』いひつゝ草鞋のまゝ大手を振つてノサ〳〵と入來りぬ、今や電光石火の間一髪と爭ふ矢聲は窓を漏れて、絶間なく打合ふ竹刀の響きに耳を欹て、ふしぎや此内に夏ならぬ蚊軍の叫びと嘲りながら、案内もなく大門に入つて左の塀に取沿ひ、江戸隨一といふ道場口の壺鐵外れむばかりに戸を推開き、ぬ

ッと首突出したる旅裝の浪人、朝夕に武運をいのりて拭清めたる浮張の板間を、のさ〳〵と泥草鞋に踏立て〻入來たる躰に、さては曲物ござんなれ折柄の一興と躍りたつ門人、いや狂氣ぞ打殺して此世の苦艱を助けむと呼ぶ門人、たゞ引ずりいだして水喰はせよと叫ぶ門人、どッと四方より取圍みし中に突立ちながら、ぴたりと大刀の柄を押へて鋭き眼を見張りつ〻、掛代のなき生命を粗末に扱ふ不所存者と呟いて、まづかに睨みまはす浪人の面魂、青みかゝりし白面に伸上りし黑漆の額髮、六尺ちかき骨格ずんと据りて動かぬ足場、すッと拔けば腕も白刃も嘸やと思ふ猛勢に、これは少々考へどころ危うし〳〵と躊躇ふ門人を、搔退けて上壇に控へし間柄が面躰を見詰め、つか〳〵と進み寄つて鬼を欺く右の腕節、ぐッ

と掴みながら額に息を吹掛けぬ『忘るまい、奥州南部の浪人座光寺勘三郎、一方ならぬ禮に參つた、いざ起てよ、起たずば引提げて宙に吊さむ』

鐺の一打にさへ二十日あまりも我を惱ましたる大剛、座光寺勘三とは一目に知つて、さすがの間柄ぎよッとせしが元來不敵の曲物、あわて〻動く場所ならずと一寸の坐も崩さず、ぢづかに見遣る右の腕節いまは早や掴まれて、南無三と思へど猶も死太き魂魄、その手を握り返して打仰ぎつ〻『一見もとより忘れぬ座光寺殿、まづ一方ならぬ禮とやらむが口上うけての後』いひつ〻骨も碎けん痛疼を忍んで聲はりあげぬ『門人衆のうち誰でもよし、客人に酒肴の用意せられよ』

世にいふ三年の戀を一夜に横取つたる女敵、色道の意恨は更

なり間柄小太郎ともいはるゝ武士を蟲と呼び畜類と叫び、剩へ鐺の心刀に二十日あまりの肩骨を疼めたる剛敵、所詮此江戸三界に居を占めて加之も鼻の前なる大塚村に彷徨ば、危うし危うし世上の外聞おのづから我道の障害となる奴、幸ひ犬骨折つて鷹にも拾はれざる田原大角の廢首を、彼奴等一家が滅亡の祟に使ひくれむと、三日月治郎が墓碑の近傍に埋めて訴人となり、かつは師弟の情義と殘る一子の主水を欺いて、後見助太刀の涙面あゝ我ながら計つたりけり、もしや必死の獄屋を脱出づれば忽ち不倶戴天の敵呼はり、進むも退くも兩道かけて攻寄する曉は、脆くも消ゆべき座光寺勘三あとは老若二人の女風情ゆる〳〵掛けて手に入れむと、あくまで巧み し間柄が奸計も綻びかゝりし今日このごろ、こゝにまた白須

甲斐とて怖ろしき一人の大敵加はるのみか、おもひもかけぬ座光寺勘三ぬッと入來る躰に、夢かとばかり驚き遁げむ我腰おッと据ゑて、これは〳〵と逆にいでたる俄かの輕薄に流石の座光寺あッと呆れて、かりにも人間の皮を被りしもの心に思ひ我に向ふて耻かしくはなきや、さても已れは不思議の奴と其顏つれ〳〵打ながめぬ、

これはしたり氣付かぬ門人衆かな、めづらしの御客に酒肴の用意と叫ぶ間柄が腕節、ぐいと捕へて會釋なく道場の中央に引摺出し、踏揉るべき憤怒の片足わざと忍びて聲はりあげ、奥州南部の浪人座光寺勘三郎、まづ改めて當場の師範間柄殿に立合むと叫べば、小太郎俄かに頓首再拜して未熟の拙者と遁ぐる口上、いよ〳〵面憎し然らば武道の慣ひ表看板を外さ

むと、さゝゆる門人五六人やッと掛たる聲もろとも人礫に取つて膽魂を推潰し、まづ〳〵と縋る間柄が面上に袖打拂ふて走いで、笑止や江戸隨一といふ武術の大看板、其まゝ引下して小脇に抱へたる座光寺勘三、悠々と歩を運び寛々と躰を構へ、見返りもせず小唄を謠ひながら護國寺の方へ立去りぬ、

魔王か天狗か鬼神か、先生ほどの達人を小兒の如く扱ひし浪人、此まゝ遣つては三百の門人いづこに立たむ、道場の表看板外されては末代までも武道の廢滅、生命ものかは後おッかけて血の雨と、去りし敵の影辨慶むら〳〵と躍り立てば、間柄小太郎兩手を振つて聲を沈め、眼中に涙を浮べて左右前後の門人を見亘しながら『きかれよ方々、武道に敵なき間柄も僅少の恩義には叶はぬ世上、思ひいづれば我れ十餘年のむかし、奥州の旅路に大病をうけて一命危うかりしころ、さる仔細あつて彼奴が父に醫藥の介抱せられ、あまの生命を無事に拾ひし恩義は夢幻も忘れざる今日、その子が俄に突入來つて斯くの有樣は、いふまでもなく素より讀めたり、いかに方々よ、敵に向ふては鬼に等しき間柄も一片の義理には三歳兒に劣る脆き心中を、あくまで知拔いて手向はぬ我を痛め罵り、江戸隨一の劍客を一瞬の手にかけたる天晴れ業と、世上に空名を飛して己が身を立てむ謀圖と讀めたり、なるほど、一たんの恩によつて方々の面前に斯までの恥辱を忍び、また少時なりとも大切の表看板を渡したる二つの義理立は、たしかに疇昔の恩に報いしと思ふは非か、もはや過分の花を持して彼奴が父を敬せし上からは、さて許しがたき尋常の素浪人、照

させ玉ふ日輪の光輝も恐れず、青天白日に間柄が道場を踏荒したる曲物、やはか遁すべき、おッかけて寸に刻まむづ奴、ゆく先は護國寺の松原、時刻はよし足場はよし、いざや恩義を返して平生の我に立戻つたる手のうち、後學のために見られよ、人斬る法はまた格別、それ方々おくれ召さるな』いひつゝ袴の股立とつて身を固め、桶の息水一口ぷッと吹上げて時ならぬ霧に滿面を濕ほし、大刀の目釘ずるりと舐めて躍りいづる勇ましさに、さもさうづ、さもありなむと俄に勇を呼ぶ門人、どッと喚いて一文字に駈出しぬ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

白面青髭するどの眼光に伸上る額髪、寸分の隙間なき骨格ず

んと据りて、見るからに小氣味の悪き座光寺勘三、所詮のことなり白刃を拔ては猶更ら叶ふまじき奴ながら、あまりの面目なさに虚勇を驅つて大刀ひッさげ、そもや我れ奥州の旅路に病をうけしころと、あくまで門人を欺きし長談義のうちに、あはれ剛敵いづこへなりとも往よかし、足早に去つて近傍邊に姿あらすな、願くば消えて無くなれ後日ゆる〳〵手段を運らして、けふの恥辱を雪がむものと心に祈りつゝ、わざと時刻をうつして去らばと立上る間柄小太郎、目錄以上の門人二十三人を引連れて、眞一文字に護國寺の方へ走出れば、早く追掛けて來よ待遠やといはぬばかりに悠々たる座光寺勘三、表看板を小脇に抱へしまゝ折々うしろを振返りぬ、南無三とは思へど今更ら詮なき間柄小太郎、二十三人の門人

を搔分けて躍りいで、片手をあげて大音に呼はりぬ『武道師範の軒下には高貴も會釋すべき表看板を、馬骨の分際もて白晝に盜みし盜賊奴、止まれや返せや、その場に捨てゝ走らば一命助けむ、あたら生命ぞ失ふな』呼はる聲に振返つたる座光寺勘三、をかしや蚊軍またも物いふたりけりと、我を忘れて呵々と笑ひつ、『いづこの世にか敵を追ふに道草を喰ふ白痴やある、さつても足の遲き奴かな、一進一退こゝに踵を計つて已等の來るを待つこと久し、あゝ面白や拳が鳴る腕が鳴る、骨身をどッて動くは〳〵』いひつゝ傍の小石に腰を打掛けながら、春の遊山に道踏迷ふ友を呼ぶが如く、兩手をあげて靜かに招いたりけり、

第十二回

もはや剛敵はるかに去つて影なきころと、時刻を圖り門人を欺き、あくまで虛勇を驅つて遁さじ遣らじと追掛れば、案に相違の南無三寶、敵は素より悠々と我を待貌なる面憎さは、路傍の石に腰うちかけ兩手をあげて麾く振舞に、間柄小太郎はッと膽を潰して進退こゝに谷まり、思はず變ずる血色に我を忘れて停むる足、それとは知らぬ門人うしろより咄と聞を作りて、猶豫めさるな先生あれに曲物みゆるはと、哀れや頼甲斐なき師匠を頼んで名聞氣早の三人、あたら腕ありながら

義理一片に任意ならぬ恩師の先鋒を、あかの他人の我々まづ向ふて物の會釋は入らぬことゝ、朋輩を駈拔け間柄を馳拔けて一文字に向へば、小太郎いまは堪らず前後を忘れて共に駈出しぬ、

門人滿座の其中に踏躙つて血嘔吐を絞るも易けれど、やゝ仔細あつて此地まで誘欺出したる座光寺勘三とも知らず、笑止や術に乘つて追掛來る白痴の運命、さるにても罪なき徒輩を痛めむは無益なり、かゝりなき有藏無藏むら〳〵ばッと追退て、本尊の彼奴一人手捕にせむと待構へたる面前へ、言句もなく飛來つて組付く三人、ゑッ退けやッと叫びざま立蹴に一人どッと蹴返せば、寸隙を得たりと左右より打入る二人を、大力の小脇に挿んで動かすものかは、宛から鷹に捕られし村

雀に似たり『ふびんや果敢なき師匠をたのむで大事の生命を抛込む奴、定めて家には親兄弟もあらむ一命助けて呉れるは、まかり歸つて醫藥を怠るな』聲もろとも一ゆり揉で左右に振抛し大勇を、これはと呆れて見物なりかぬる間柄小太郎、流石は武道一派の棟梁する〳〵と足場を進めて俄かに迫らず、大刀寛げながら焉也の呼吸を覘ふて詰寄れば、座光寺勘三また石に腰打掛けて松の大木を背に當てつ、取外したる大看板を前に立てぬ『急くな〳〵、浮張道場の板間と違ひ一命あやうき場所ぞ、せめては其方も武士の死晴れ見苦しき振舞謹しんで、所詮用なき多勢の門人に傷を負すな、かつまた作りし罪の懺悔もせよ、座光寺勘三おのれが當の敵でなし、けふの最期は田原主水の助太刀ぞ』いひつゝ俄かに立つて四方に響

けと叫んだる大音は、むかし宇治川合戰の雷鳴坊を欺むきぬ『主水いづこに居る田原の一子いでよ〳〵、不俱戴天の仇間柄を引寄せたるぞ』

可憐の孝子いづこに居る、田原主水いでよ、汝がために不俱戴天の仇を引寄せたりと叫ぶ聲に、さらぬも進退こゝに谷まりし間柄小太郎、うぬ座光寺とて鬼神にもあるまじ、ましてや此ほど獄屋に疲果てたる身、我はこれ一流一派の棟梁武士に刀は斷鐵の業物と、拔放つや否や頭上に振被つて飛掛らんとするを、看板楯に取つて寸も動かぬ勘三ぞろりと睨で、哀れや凡夫なりけり、さすがに平生は斯くまで劣るまじきに、心みだれ胸をどつて太刀筋もどろに流れたりと、おもふまもなく疾風と打込みし間柄が鋒刀は、劍道師範と筆太の已が大

看板を眞二割、宛から豆腐を切る如く音もなき手練、天晴れと見ゆれど指す敵の袖の端も削り得ず、南無三これはと驚く間一髪は白痴に取つて三年の星霜、やッと叫ぶ一聲に座光寺が身躰をどり來つて、間柄は忽ち大地に組敷れぬ、

不俱戴天の父の仇と呼ぶ聲に膽をぬかれ、今また眼前に淺ましき師の躰を見る二十三人あッと呆れて、いよ〳〵頼みなき人心たゞ木偶に等しき門人を、磐石押に組敷きながら靜かに見上ぐる座光寺勘三『いかに人々、この間柄は一片の戀に眼眩んで十年つゞきし已が弟子、お身等が友なる田原主水の父を寢首に搔たる曲者ぞ、手出し召さるな、さりとて師弟のよしみに生命とあらば五十に足らぬ足並いざ打揃ふて』いひつつ間柄が襟首ぐッと摑んで一しほ押据ながら『今うちこみし

太刀筋、六寸にあまる槻の厚板を音もなく斬割りし拳、慌て平生に劣ると思へば猶更ら美事ぞ、我なればこそ無事なるほどの汝、天晴れの武士を潰すな、さほどの腕に卑怯の名を負すな、所詮遁れぬ天の報い人の報い、あらためて觀念せよ、かつまた世に言殘さむ筋もあらば聞屆けくれるぞ、あゝ偖も惜しき奴かな、その身躰に曲らぬ魂魄あらば天下誰に讓らぬ不群の男ながら』ほろりと落す涙の雫に襟首ひやりと打たれて、五臓六腑に染渡る間柄小太郎ほッと苦しき息を吐き『座光寺どの、そも來歷いかなる御人か知らねど、まことに御身は世に怖しき武士、わがために一念最期の恩師ぞや、志ばしこゝ許されよ、間柄小太郎奴あらためて孝子が白刃に掛り申す』『むゝ流石に〳〵、さらば仔細なし』いひつゝ引き起せば

今更恥かし氣の顏色ふりあげて、見返る背後に田原主水すくりと立ち、居並ぶ門人を隔てゝ編笠きたる立派の武士、これに從がふ數人の侍が威儀を正せる中に、いよ〳〵悔悟の臍を嚙切る小太郎、兩刀を芝に拋出して左右前後に會釋しながら『まづ、そこに御面躰を隱させ玉ふは、この間御招によつて御意得し方と見參らす、座光寺殿はじめ主水殿、その他の人々、かつは多年の門人衆まで、今は敵味方あはせて方方に哀願の筋は外ならず、間柄小太郎直友こと、なげくべき妻子眷族はなけれど、路頭に、おもはぬ路頭に屍を晒して草の葉末に血を塗らむは、太平に生れ合せし身の祖先に對して、かつは是まで幾千の年月わが手に掛りて育ちし門人に對して、いかばかりの恥かしさ、いかばかりの氣の毒さ、神もつて今生の無

念で御座る、あはれ此上の御恩には、何卒、わが邸内まで引摺行きて、寸々の御せいばい、頼む、頼み入る』

第十三回

人の身に悲しきものは罪なくて見る呵責の憂目なり、わけて悲しきものは世にいでゝ誰に劣るまじき生涯むざと闇き獄屋に捨てゝ、照さぬ日影に血の涙ぞぼる人の上なり、なほも悲しくいぢらしきものは我身に過ぎたる男を持ちて肌にぞみじみ添ふ間もなく、そのうつり香を長き別離の形見と泣く妻の

上なり、

花に別れし蝶のうらみと餘所に聞きたる小唄の一節も、おもへば果敢なく忌はしき前兆かや、今はめぐりくる我身の上と歎ちつゝ、そもや罪なくて捕られし良人の厄日より、三日の月かげ圓になりて又もや缺行く今朝の曉まで、殘る女の身一個を何とせむ、さりとて斯らむ時は猶も頼み頼まるゝ母女だ二人の中に、年若き身が正躰もなく泣崩せば老たる母が一しほの歎き、かつは流石に人目の世上ぞッと齒を嚙占めて堪ゆれど、夜に入れば晝の溜涙ぼろ〳〵と溢れて打被ぐ夜具に喰付き、さん〳〵おもふまゝに泣盡したるその果は、かきくどく佛神を恨みて勞れし身の詮方もなく、うと〳〵と眠れば忽ち夢に見る良人が淺ましの姿、色青ざめ肉痩せて血走る眼

を見張りつゝ、怖ろしき獄卒に責めらるゝ無念のありさま、あるにもあられず目もくれ心きえて我を忘れ、きやッと叫ぶ聲に耳驚いて夢さむれば、ともし火睡る影より涙ながらに問ひ玉ふ母が顏、蝶や嘸かなしき夢を見つらむと慰め玉ふ母が言葉に、いよ〳〵苦しき我胸の張裂く思ひも何とせむ、いのちを捨てゝ神田橋の訴訟もその詮なく、母が日夜に番町への泣込も其後の沙汰なければ、あはれ我等がためには闇の夜の中、照る日を仰いでも涙に曇る憂身の悲しさと、花顏いつしか色さめて翠の鬢も梳るに懶く、ぢよんぼりと壁に對ふてをり〳〵の念佛は我身のためか良人のためか、泣て藻搔くうちには心に賴みあれど、沈みて諦むる後には世にある甲斐さらになく涙かれて骨痩せぬ、

はや今日は婿が引かれし其日の一週ぞや、せめては蔭ながら無事をいのる心の祝ひ、母子が手料理に食物とゝのへて配膳せむと、涙ながら厨の方に立働く折しも、慌氣に門口より走入る人の足音、お蝶出でゝ迎へば見知らぬ一人の武士、腰の大小ゆりなほし額の汗を拭ひつゝ、小腰を屈めて舌早に問ひぬ『三日月の尼御は宿にか、和女は聞及ぶ娘御か』はいと答て貴方樣はと尋ぬる間もなく、振返りて外面を指さしながら『拙者は番町の白須が家來で御座る、今朝、座光寺殿は御不審晴れて赦免の其まゝ、たゞいま護國寺の松原に、天晴れ美事の助太刀〳〵、間柄奴を捕へて田原主水の後見なさるゝ最中で御座る、まづ主命によつて此段を、されど女性のいづべき處で御座らぬぞ、やがて目出たく御歸宅〳〵』前後揃はぬ口

上演捨てゝ走りいづれば、お蝶あわてゝ其まゝの徒跣に門前まで追行き、武士の袖とらへて片手に伏拜みつゝ『あの無事で、勘三は、勘三は息災で御座りますか』『ゑッ無事どころか助太刀テ、天へも昇らるゝ勢で御座るは御免あれ』袖ふりきッて一散に駈出しぬ、お蝶あとみおくりて大地に坐せしが又むくと跳起き、内に走入れば母も聞付けて轉びいづるを、言葉もかけず擦違ふて我居室に走込み、裾からげて帶ひきしむる有様に、お蝶これお蝶と脊を叩けば頻に首をふりて『いや止てくださんな、叱られても、何とせられても、妻が良人に逢ふためぢやもの、ゑゝ氣が急く今の御武家に後れてはなりませぬ、あゝ足が重い』

第十四回

他人を謀らむとして他人に謀られ、かいたる裏の又その裏を搔かれて、今は進退こゝに谷まりし間柄小太郎、所詮逃れぬ奈落の底に落ちながら、さても不群の腕節に不敵の奸物、あくまで屈せぬ死際の一念、よしや野末の草に屍を晒して明朝は旅烏の餌に腸を拷らるゝとも、いま眼前に遮ぎる敵といふ奴のかぎり白刃の鎬を削るまで、あはれ狂死に働いて最後の悪念を引かむものと、怖ろしや思ひつめたる鬼畜の根性も、天晴れ武士を潰すな可惜ら男を捨つるな思置く事なきか言遺

さむ事はなきかと、座光寺勘三が一滴の涙に襟元ひやりと打たれては、とけて流るゝ雪達摩さとれば脆き人の情義に、さすがの間柄はら〳〵と泣いて生涯の罪に身を抛げし一言、なるほど哀れなり健氣なり然らば其意にまかせむと、志のびの編笠主従いづこともなく立去りて、のこる座光寺勘三は助太刀後見、田原主水と共に小太郎を警りて音羽町の邸宅へ行きぬ、

妻子眷族なき身は斯らむ時の心易さ、いざ去らば此方へと懇懃に伴ふて、おのが常の居室なる中央に座を正し、左に田原主水を乞ひ、右に座光寺勘三を招じ、二十三人の門人その他の諸輩を一室隔てゝ控へさせぬ『座光寺殿には怨恨を恩に返されし今日のありさま、何として言葉に盡さるべき、一念たしかに草葉の蔭より武運を祈り参らせむ、主水殿には言ふも恥かし言はぬも辛き數々、唯そのまゝに立寄つて一寸だめし五分に刻まれよ、あはせて其處なる門人衆には、さても淺ましき間柄が成の果を染々御覽じて死後の形見にせられよ、一つには世に思ひ合せ身に省みて、ゆめ一身一家を過ち玉ふなよ、かつは我如き畜類の墓所回向は固く無用、この家屋敷は賣拂ふて如何ならむ世上の報謝にも施し玉へ、噫おもへば三十四年の夢、志かも悪き夢は見たれど、心ある眞實の師を得て覺際の心地よや』いひつゝ大肌すぼりと脱いで兩眼を閉ぢしが、何思ひけむ俄かに振返りて座光寺に對ひ『姑御と御内寮へ御謝罪の御傳言たのみまゐらする、せめてこの姿を一目なりとも御覽に入れて、あくまで憎しとおぼせし心を和げた

し』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

うらめしや所詮この世で逢ふことのならざるは、我身に過ぎたる男を持ちし冥加の破滅か、なさけなや悲しやと心も消え肉も落ちたる鼻前へ、和女の良人座光寺殿は今朝めでたく赦免、其まゝの足に今は護國寺の松原を踏み、田原主水を助けて天晴れ働きと、白須よりの密使に足腰ぬけむばかりに驚喜のお蝶、夢ならば覺めであれかし逢ふて一言、もし實ならば盲龜の浮木はおろかの喩言、女の出べき場所ならねば何とて我に告知らせしぞ、知らば此まゝ首を伸して待身の蝶と思ふてか、叱られても打たれても、よしや白刃の林にもあれ、鬼

の戦ふ中にもあれ、いとし可愛の良人があるべき處へ、妻がたづねて行くに何の觸りぞ、そこ放して下さんせと、母が捕ふる袖を振切つて狂氣の如く門外へ駈出し、見れば今來し武士が一散に飛行く後姿、なむや韋駄天明王助け玉へ、後れはせじと裾をからげて後を追ひぬ、みどりの黒髪は風に向ふて小涙をうち、源氏車の裾模様は眞白の脛に戯れつゝ、兩の掌に兩の乳房を持添へて、走出す姿は畵なり心は嬉しの涙なり、」さても口惜しきは女の足、武士を見失ふて愈よ氣をいらち、息きれ〳〵に護國寺の松原まで辿りつけば、東西に走り南北に騒ぐ見物のみ、良人の姿は素より敵味方も影なきに、お蝶がくりと氣を抜れて唯うろ〳〵、走行く人の袂を捉へて仔細をきけば、その敵討は同勢打揃ふて俄かに引上げ、この裏道

を音羽の方へ駈行きしと、聞くや否やまた取て返して遙かに見れば、この日ごろ憎き怨恨と思ひつめたる間柄が裏門より、ぞろ〳〵と入りし多くの人影に南無三、かへりうちの勝閧あげて凱歌の勢かと、いよ〳〵良人の身の上きづかはしく、また走付いてみれば門扉かたく閉ぢて音もなし　さらばと表門にまはればこゝも鐵壁おせども叩けども更に甲斐なし、されど仔細を見分けむ其までではと、彼方に彷徨ひ此方に立寄り、四方をめぐりて待つ折しも裏門ぐッと推開いて、あらはれいづる人影やれ嬉しや、餘所ながら問はむと見れば懐かしの良人なり、おもはず聲立てゝ取付かむ間もなく、また續いて出づるは身輕の裝束したる若輩の武士、袖の端に血汐の染みたるは聞にし主水殿かと、走出づる姿を座光寺勘三ちらと

見ながら、顔を背けて田原主水を伴ひつゝ、悠々と歩みゆく後姿ゑゝ心強し男はさうしたものか、これこゝに蝶が居まするぞや、見えぬかと恨て後より足早に付行けば、をり〳〵見返りて鋭き眼光に睨まれ、ぎよッとして身を縮めながら又わすれて走付き、また睨まれては又おもはず立止り、大塚村の入口まで辿りしころ、勘三聲を低めて何事か主水に私語けば、主水一禮もろとも走拔て一散に行くを遣過したる勘三、やう〳〵振返りて片頰に笑を含み『蝶か』この一言に前後わすれて取付き、ゑがみついて溜涙はら〳〵と泣きぬ『ゑゝ弱い女、母御は無事か』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

流るゝ水も岩に當つて碎けし末は一しほ清く、隈なき秋の夜も雨後の月には一段のながめ多く、人も一度無念の涙をぼりて袖も袂も濡勝る後に男一貫さらに晴れていよ〳〵氣高し、田原大角が寐首を掻いたる曲物は、座光寺勘三あらたに持ちし己が妻母への婿引出とて、結べば掛る十八年むかしの怨恨を報いし證據は、かの三日月次郎が墓前に其首を埋めたりと、寃罪の訴人せられて捕れしかど、善惡吉凶よろずに動ぜぬ勘三、おもふ謀計の本人は間柄小太郎その仔細かくの如しと、筋を辿り序を逐ふて滔々の辯に曇なきのみか、外には白須甲斐、とて天下出頭の從兄を持ち、いま眼前の奉行も其推擧にいでし人物、それこれ內外の働き合期して一しほ映る白洲の明鏡、忽ち不審はれていづる獄屋の門前に待受けし白須の密使、

其まゝ伴ふて番町に行けば御苦勞ながらと主人のたのみ、涙ながらの田原主水が哀れに前後を見返りて、むゝよしとの一言は金鐵磐石、さらば神速を尊ぶ旅の姿に敵の巢を驚かし、おびき出して首尾よく遣りしのみか、さすがの惡奸を最後に泣して互ひの武士を潰さず、いさみの涙に清く治めし手際のいち〳〵、語りいづるを聞入る母と聞惚るゝ妻、無心に擦寄りて我を忘るゝ笑渦の泉、をしげもなく打滾して驚喜に狼狽へつゝ、六尺近き大勇の男を右左より小兒の如く擧立てぬ、きのふまでは萬事かなしき冬の空、けふよりは何事もうれしき春の曙、いざ祝酒一献くんで番町まで行かむ、奉行所に居出たる主水が身も氣遣はしと、ゆふべ一夜に殘る談話は山々の妻が引止むるも聞かず、災禍のあと氣をつけ玉へといふ母

が言葉に首肯いて、例の編笠に四寸黄金の鍬形うちし大小ゆりこみ、大塚村をいでゝ傳通院より牛込に取り、まづ神楽阪の主水が宅へと志す道すがら、幼少より好める武器の鑑定は天晴の勘三、ある古道具屋より一筋の手鎗を買求めて、世にいふ掘出物かゝる名器を市井の銅臭に埋むるとは、不群の武士が草を敷寝の夢に泣くも同然、さても痛はしながら我手に入りしは盡ざる運命、いざ番町へ持行きて誇らむものと歩む折しも、前路より宙を飛で駈來る馬丁一人、なんとかしけむ十分に退いたる我足下に控と轉びぬ、

旅の川邊に雨後の燕を打損ねて涙ぼろ〳〵とこぼし、噫われ二十八年の修行に天下敵なき名譽の男ながら、尺八寸の鐵扇ふつて小鳥一羽を外せりと、泥に伏し聲を上げて泣きし昔の

勇士は知らず、この座光寺勘三小指の爪先に蚊蜻蛉の頭も打損ずまじき眼前へ、五尺の人間一疋飛來つて退損ねん道理やある、必定下司奴小石に躓いて轉びしならむと、其まゝ過行かむとする座光寺勘三を、むくと跳起きし馬丁つか〳〵と追來りて、いま買求めし手鎗の石突ぐッと摑みぬ『やい待て、れき〳〵の御馬前を駈行く我を突仆して』『ゑッ無禮者』見返りもせず聲もろとも持たるまゝの拳を振へば、鎗の石突ぶる〳〵と強く響いて腕ぢびるゝ奴またも控と轉びぬ、

折しも鞭音高く蹄を鳴らして駈來る馬上の武士、疾風の猛勢すッと馳拔いて再び駈戻りつゝ『なんといたした』いふは三十前後の凛々しき華奢に、どんすの卷羽織は此ごろ流行る旗本衆、天下の直參とて嘯く虎の威をかる狐の奴、勘三を指さ

しながら大地に片手をついて、『こやつ奴御馬前の私とも憚らず、槍の石突あげて双脛拂ひし無禮を、たゞいま出入の最中で御座りまする』馬上の武士そのまゝ憤怒の眼を勘三に射向けて『うぬ失躰者奴、一僕召連れぬ分際が白晝に槍をさげて横行するのみか、馬前を遮ぎる仔細を語れ、いづこの藩か但し浪人か、名乘れ曲物』ぎやッと斯世に生れしより權柄育の大聲はりあげて、鐙踏張り手綱ぢぼッて睨みおろすを、編笠越に見上て冷笑ふ勘三みぢんも動かねど、さすが浪人の悲しさ槍の穂鞘を下して小腰を屈めながら『この廣き大道を何として遮ぎるべきや、眼前一たび駈拔けられしが第一の證據、また馬奴の双脛拂ひしとは案外の欺言、かりにも兩刀の拙者斯る下司一人に恩仇は持ち申さぬ、御覽の槍は古道具屋より

買求めし品、これも立ては持ち申さぬ逆手に穂を横たへて歩み居ります、但し拙者を一見曲物との御一言、ちと此方より其仔細うけ玉はらう、藩士か浪人かは御詮議にあづかるべき筋でなし、馴れたるまゝの御過言、再び召されなば許し申さぬぞ、よしやいづこ如何なる衆にもせよ』いひつゝ大刀の柄ぽんと叩いて呵々と笑ひ『御覽ぜよ、をり〳〵鞘走りいたすものが御座るは』

きのふの寃罪やう〳〵晴れて斯世に出でたる身、尋常のものならば道路の歩行にも心を配り人の袖袂にも氣を用ふべき折から、我より好みし業にあらねど差掛る馬奴の過失より、他に人なければ遁れぬ馬上の武士と爭ふて、一言一句に血色かゆる危うき場所、忽ち腰を屈め首を垂れて大地に跪づき、鼠

の如く逃たらむには助かる筋もあらんもの、さても兩刀の手前、もつて生れし不敵の性根、この座光寺勘三には骨身を削らるゝとも出來得ぬ耻辱と、買求めし手槍の石突あげて堪兼ぬる憤怒の大音聲『いづれの方かは存ぜねど、れき〳〵の身分ならば猶更ら以て、この廣き天下通行の大道、少しは馬上の遠慮といふことを知られよ、知らずば敎へまゐらせむか、みるかげもなき浪人ながら此方も武士で御座るぞ、入らざる詮議に暇取つて御用を缺かむより、いざ指す方へ鞭の代りの石突一本、袖ふり合ふも他生の緣の嘘ぞ』聲と等しく馬の夜眼を覘ふてえいと突出せば、大力の石突に當られて腸に激へし一聲の悲鳴もろとも、竿立に躍つて其まゝ一散に駈出しぬ、乘つたる主は手綱ぢぼつて引返さんと焦心れども、狂ひに狂

ひし荒馬の悲しさ大地を蹄に割つて雲を霞の笑止さを、ぢづかに振返つて編笠越に見送る勘三、おもはず呵々と笑ふ物影より、隱見出沒に覘行く馬奴のありと知らぬは、また身にふりかゝる後の災禍なりけり、

第十五回

いづれの世にも權威は懷手に取れぬものながら、四海波ぢづかに治まる太平には、その子孫つたへ〳〵て祖父親の苦勞を知らねば、たゞ天上界の快樂を夢の中より夢にうけて、あま

たの家來が袖屏風に生育ちし果は、人を見下し人を叱るに馴れて空みぬ驚の眼鋭き世の中を、草の葉蔭と唄はるゝ浪人の身として衆に勝れし膽魂魄を持ち、去かも首骨硬く腰骨かゞまぬ男何として無事なるべき、かくて生涯の安樂を祈らば人すまぬ里に隱れて水を飲むより外に詮もなし、さればこゝに座光寺勘三、奥州の果より大江戸の眞中に飛込來つて、きのふの今日またもや掛る頭上の煩ひ、必定それと知りつゝも退かぬは武士の一物さても不運と、おのが意氣地に身を潰すも嵐に添ふや櫻の風情、散るを勇士と誰が唄ひける、

神樂阪の田原主水を訪ふて危うき無事を喜び、番町の白須と語りて行末の身の振分に、まづ一獻めでた〳〵の杯重ねて目の邊ぽッと彩りながら、大塚村に立歸れば偖も妻は一世の枷

と見えぬ於蝶が立働き、いづこに緣ありとも知れぬ身の老母が待遇、夜更るまで三人うち笑ふて樂しく寢し短夜の、まだ明放れぬ表の戸を叩く者あり、於蝶立出でゝ誰と問へば、門際に駕をおろして附添ふ一人の使者『きのふ牛込にて御目にかゝりし馬上の者、九段阪の下に住居いたす吉田四郎左衞門より、こなたの主人座光寺殿を御迎ひにまゐりました、もしや御不在ならば御歸宅を待つ、御所勞ならば此方より推參いたすとの口上、よしなに御取次を願ひあげます』

於蝶いぶかりながら内に入りて斯くと告れば、勘三枕を欹て靜かに首肯きぬ『むゝよし、實は昨日番町への道すがら、おもはず竹馬の舊友に出逢ふて約束はしたものゝ、さりとては性急な奴、その駕をばし待たせよ、歩むも面倒あたら迎ひ

を追返すも情なし』いひつゝ起出でゝ顔を洗ひ朝餐を終へ、お蝶に頭髪搔上げさせて衣服を整へ、あとに氣をつけよ、事によらば歸宅の遲からむと呟やきながら、其まゝ大刀を引提げて悠々と立出でぬ『むかひの衆か御苦勞ぞ、いざたのむ』きけば我身にあたる三日月治郎も、總州大井戸の隱家より佐倉の田原に招かれて、虎穴と知りつゝ莞爾と笑ふて飛入りしとかや、おもへば石を抱いて深淵に臨むが如き愚なれども、この愚を末世の今に求むれば廣き大江戸も狹きたとへ、みちみちたる憶病神を守本尊と仰ぎて事あらば向脛に馬の字を書く世の中に、春やゝ暮れて薄ら眠氣の今日このごろ、我ひとり戯れて男の白痴をつくすも面白し、されば今この座光寺勘三を招く吉田四郎左衞門とは、無役三千石の旗本にて疇昔の

組衆を慕ふ奴とぞ、かねて聞及ぶ鼻先へ草葉の素浪人むづと座して、世に唄ふ三河衆が成の果をも弔ひ、かつは野に器ある眞實の骨をも味に食はせて、この一日の閑を遣らむは無上の快樂、牛込の出入なんとは三寸の舌に卷て二言と吐かせじ、いざ去らば呵しき節になりけりと、おもふ間もなく乘つたる駕は九段の阪下に止りぬ、

案内に引れて奥深く入れば、七八人の直參衆廓座に居並びて杯盤かたぶき酒氣ほとばしる躰、さてはと思へど動ぜぬ座光寺勘三、會釋しながら少し隔てゝ座につけば、主人の四郎左は手を差出して迎へつゝ『いや遠路よく參られた、まづ此方へ〳〵、方々みられよ、あれが噂いたした昨日の人で御座る』言葉に連て一座等しく頭をめぐらし、勘三が面上を射的の如

く打ながめぬ、

座光寺は慇懃に禮を正して聲ちづかに向ひ『きのふは往來の御馬上に御暇を潰させ、恐縮に存ずる今朝わざ〳〵の御迎ひ、何かは知らず徒然に暮す浪人の嬉しさ、また面白き御意もあらむかと、辭儀を忘れて斯く』『いや挨拶いたみ入る、拙者が當家の主人吉田四郎左衞門で御座る、あの時は何分にも途中のこと、さすが身分に對して其まゝに過ぎむも如何と、心ならぬ無禮を申した、されど其時の應答振といひ骨格容貌といひ、いづれ由緒あるべき人と存して、いはゞ敵ながら慕はしさのあまり、近づきのため一献まゐらうと存ずるも、きかれい、治まる世の末は、天下に唄はれし我等の同衆も今は婦女に劣りし風儀と成下り、八萬餘騎いづれも語るべき男なけれ

ば、恐れながら行末の淺ましきを歎ち、上へ對して一封の所存を書上しが、あはれ其時の連名十八人、悉く役儀を放され、かく無念に閑散の砌、日毎の酒宴に同じ顔のみ見るも興薄しと、折からの貴所に出逢ひしは武道の喜び、いや浪人とて石取とて武士に二樣はなき筈、ずッと進まれよ酒まゐらぬか、これはしたり、あたら花に月なき風情』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

脆は江戸三界に盾なき男を一瞬の手に弄べば世上たれにか劣るべき、情けは飽まで死太き曲物を最期の際に泣せて仇を恩に返す心の立派さ、男振はよし膽魂は強し、平生無口に生れたれど吐く辯は物の道理を辿りて、頭上の權威に怖れず眼下

の弱卒を蔑らず、身は大道を眞一文字に走つて踵を戻さぬ座光寺勘三、いづこより見るも天晴れ美事の武士ながら、世は一反の藪中に釣竿七本の假言、偖かゝる男を太平無事の當世に永く浪人させむこと、名玉を草間に埋むるのみか、果は所詮の不運めぐりきて、風に憎まるゝ高木の終焉や遂げむ、あはれ彼が分相應なる仕官の道もがな、遊食の民となつて可惜ら器量を捨てぬ分別、あれに肝煎せむか、これに取持たむかと流石に繋がる徒弟のえにし、ひとり思案に暮行く春の庭景色を眺つゝ、脇息によりて一室の端近く出れど心の奥深く考沈む白須が前に、取次のもの入來りて案内を乞ひぬ『座光寺殿が參られまする』

よき折柄ぞ此方へといはせて待つほどもなく、中置の腰障子

さらりと開けて入來る座光寺勘三、みれば個は如何にぞや、黒漆の如き浪人風の額髪すぼりと剃落して、あらたに青黛を塗れるが如き撥鬢の大額、水櫛の隙髪に蟬折の髷節、世にいふ町奴の額際と變じ聞及ぶ六方臂突の姿となりぬ、

白須甲斐一目に坐を動かして眉を寄せつゝ『これは何と召された』勘三にこりと笑ふて坐につきながら、馴れぬ大額を手掌に打叩きぬ『座光寺勘三、仔細あつて今日より俄かに武士を止め申した、あらためて町奴となり申した、御覽ぜよ先づ證據の看板は斯の如し、さても夏氣に向ふて風の吹來る道すがら、涼しう心地よく我ながら身も輕く胸も清く、とんと嘸昔の兩刀を忘れし氣樂さ、いや世の中は何事も町人のこと、面倒なる侍氣質は嫌になり申した』いひつゝ呵々と笑ひぬ、

呆氣に取られし白須甲斐、まばし其顏見詰て小膝を進め『勘三殿、眞實武士を』『もとより梵天八幡かけて武士を諦め申した、まづ其仕細は、今朝九段阪の下屋敷吉田四郎左衞門といふ旗本衆に招かれて、何氣なく參つたが事の起因、かつは三日月治郎が後家を母に持ち、小車源次が女を妻に持つ勘三、聊か不思議はなし、幸ひの事と存じて町奴』『むゝ吉田、なるほど四郎左が許へ如何なる次第あつて、またそれが起因とは何の所存より』『お尋ねなくとも、その仔細語らむため大塚にも歸らず直ちに當家へまゐり申した、座光寺勘三が武士道さらりと抛げて町人になりしほどの一條、甲斐殿、其許の外に語るべき人は御座らぬ、男が生涯の吉凶取捨、まづ聞いてたもれ』いひ終つて兩眼の涙はら〳〵と落しぬ、

野にある器むなしく草に埋れて朽むよりは、いざや都會に轉げいだして估らばやと所存かた〴〵、なん〳〵の事由仔細あつて奥州南部の山の果よりはる〴〵この大江戸に旅の草鞋を脫ぎし甲斐もなく、誰しも人の生涯に一度は持つべき妻の上より、戀の敵と覘はれて忽ち身にふりかゝる災禍の宿、闇き獄屋に無念を忍びて雨後の月影やう〳〵晴れし程もなく、またもや思はぬ途中に思はぬ敵を拵らへて、所詮このまゝには前途の疊る座光寺勘三、それと知りてや我から好んで九段阪なる虎穴に飛込み、虎子を取損ねたる怒りか但しは狂ひしか悟りしか、花は櫻に人は武士なる疇昔の面影さらりと抛げて、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

俄かに剃落したる町奴の大額、六方臂突の姿に白須を驚かして仔細を問はれ、はら〳〵と泣く男の涙に何が籠ると問へば、あれも知らぬ、これも知らぬ、知らぬ〳〵で萬事いはぬが花の世の中に、あはれいつしか二代の三日月と仰がれて、八百八町に又もや縄鼻緒の駒下駄からころと響かし、胴金卷の一本おとしに風をきる二本の向脛、懐中に白紙二帖の用意忘れぬ勘三が半生を、いつかまた時機を得て書く筆の伏兵どッと起ころは、ことしの初雁みだるゝ前兆に知り玉へかしといふ、

いつもながら例によつて頭だけは稍たしかなれど、腰より下ぼッと朧氣の幽靈小説、これを軍中にては、明珍の兜いたゞき三文の吊草鞋を穿つ武者振といふ、

後の三日月　終

明治二十八年六月廿七日印刷
同　年七月一日發行

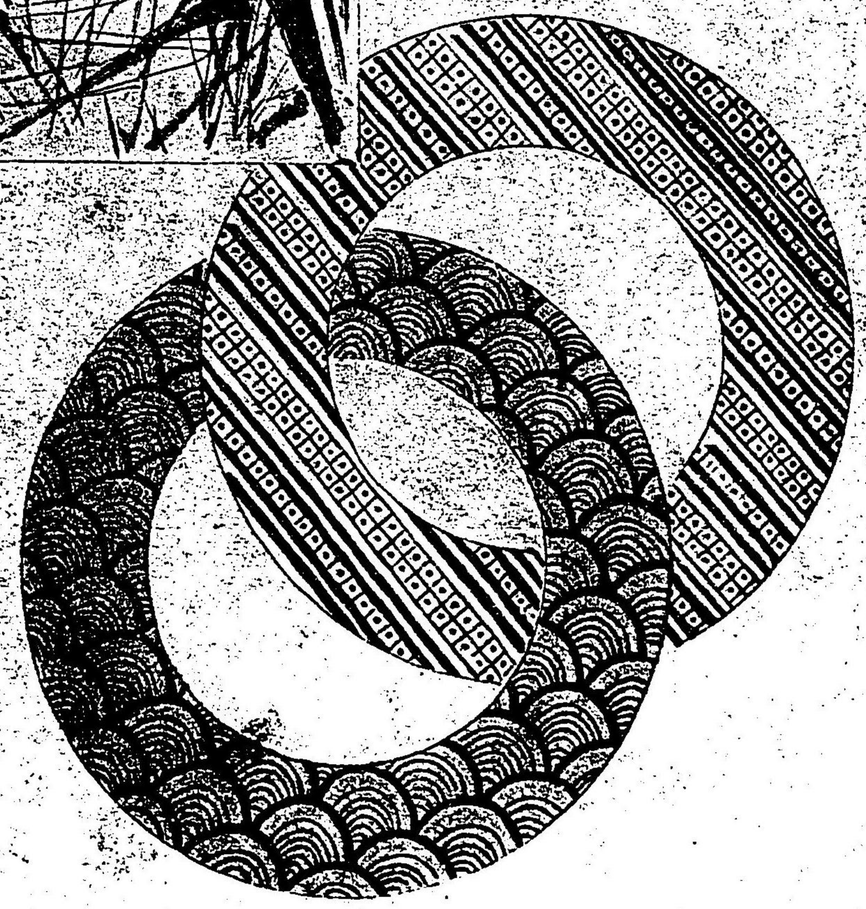
後の三日月奥付
實價金貳拾錢

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　村上信
發行者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　和田篤太郎
印刷者　東京市日本橋區通四丁目角　根岸高光
發行所　春陽堂　電話五拾壹番
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍第一工場（電話十九番）

版權所有

●内に發行者の印捺印なき物は偽造出版物なり●

45
119



43
119

43
119

094906-000-8

43-119

後の三日月

村上　浪六／著

M28
DBQ-2494